

全国高校生は政治闘争の先頭に起て！

高校を安保粉碎・日帝打倒の砦とせよ！

反戦高協

●目次

- ・七十年四～六月安保決戦を全国四五十万高校生の闘いとせよ
- ・炎の学園から日本革命へ 藤岡一昭
- ・七〇代高校生運動論へのアプローチ 下村賢太
- ・反戦高協第一回全国大会基調報告全文

NO 16

反戦高協中央機関紙

反戦高協

No.16

● 目 次

- ・ 70年4～6月安保決戦を全国450万高校生の闘いとせよ
- ・ 炎の学園から日本革命へ 藤 岡 一 昭
- ・ 70年代高校生運動論へのアプローチ 下 村 賢 太
- ・ 反戦高協第1回全国大会基調報告全文

反戦高協中央書記局

■ 激動をきりひらく革命的共産主義者同盟の綱領的文獻

勝利にむかっつての試練

革共同安保問題重要論文集

激動期の時代認識を先んじて
うちだした革共同第三回大会
報告全文をはじめ、十八羽田
闘争から四二八沖繩奪還闘争
までの闘いの指針記録を収録。

本多延嘉編

A5判五四頁
定価 一、二〇〇円

- I 革命的共産主義運動の進むべき道
- II 七〇年安保闘争と日本革命の展望
- III 七〇年への前進——全学連再建、十八羽田—四二八

創刊十周年記念

前進縮刷版

前進社

豊島区東池袋2-62-9
振替・東京88857

- 第一巻（一九五九～六三年） 二〇〇〇円
- 第三巻（一九六六～六七年） 一三〇〇円
- 第四巻（一九六八年） 一〇〇〇円

七〇年四月六月安保決戦を

四五〇万高校生の闘いとせよ！

◇ 帝国主義的・高校教育の破綻と

六九年反乱の爆発

(1) 帝国主義とわれわれの闘い

11月決戦は青山高バリエードに始まる全国高校政治バリエード闘争として高校生を街頭に引き出し、高校生自らの手による独自軍団の形成と、同時にそうした帝国主義の危機と一層のプロレタリア的自覚を全国高校生に植えつける事となり、大衆の戦闘化を「正常な」事態とする時代を切り開いていった。

六九年11月決戦における日米共同声明の登場を「敗北」とする諸君たちの言辭にもかかわらず、帝国主義のより一層新たな危機への突入は誰の目にも明らかなる事である。ベトナム戦争の敗北（後進国半植民地支配の崩壊過程）と、朝鮮危機（朴軍事政権の動搖）を一方の軸とし、他方アメリカ帝国主義の経済危機（日帝の経済的膨張とアジア侵略への不可避的展開という万方の中で、日帝はなんとかして城內平和（国民的合意）のもとで侵略をはからんとしたにもかかわらず）11月決戦は、革命的左翼（とりわけ中核の存在）を七〇年代階級闘争の主役として登場させるに充分な土壌を切り開いてしまったのだ。

一つは高校が革命の学校の役割を果たしてしまふ事である。

そもそも手工業生産に物質的基礎をおく時代においては、教育とは従弟制度であった。マニファクチュアの時代において、生産者を商人資本家とし、中世的都市工業の同職的組合の手工業に対立させ、さらに根原的蓄積過程（労働者を彼の労働条件の所有から分離する過程）社会的な生活および生産手段を資本に転化し、他方で直接的生産者を賃労働者に転化する過程）を通じて創り出される自由労働者群の創出は従弟制度の崩壊（従弟からの解放をもたらす）、①農村生産者、農民からの土地の収奪による賃労働者を創出したが、②それは同時に龐大な不熟練労働者の産出（手工業活動の分裂）を意味し、労働者の育成にとって、やはり長期の修養期間が必要となり資本は絶えず労働者の不従順（資本の要請に合致しないため）と争闘しなければならず、それに規定されて、教育は重要な役割を果たした。

だが商資本にとってあくまでも外在的であった教育に対する資本の要請は、機械制大工業の発達と商品経済の根底的浸透を経る中で労働力と教育との資本制的関連を成立させ、相対的剰余価値の（必要労働時間の による剰余価値の増大）生産として、「工場条例や「初等教育法」を国家の法律の規制によって現実化させていった。したがって「公教育」は相対的剰余価値の悪魔的遂行（学童・婦人を非人間的にコキ使う！）によって完成させられていった。

もって生産資本として「剰余価値生産物の取得のみならず同時にその創造が資本の機能であるような、資本の唯一の定式様式」たらしめるべく性格として「公教育」が重視されていった。国家によって成立させられていった官公立学校がそうであり、教師を養成して

だがしかし、さらにブルジョアジーにとってぬきさしならぬのは、11月決戦の質をもった政治闘争の全人民的浸透である。一月三里塚の少年行動隊の登場、沖縄全軍労働者の武装と反戦派労働者の増大、そして高校における「悪しき」（革命的と読め！）ゲバ高校生が増大である。

とりわけ戦前における天皇イデオロギーは今日帝国主義にとって、役立たずになっている以上、教育というあたかも帝国主義支配から相対的に独立しているかのような政策を駆使する事に、イデオロギーの支柱を求めていた。小学校中学校の義務教育化と高校の乱立は、卒業すればすぐにも工場に送りこめるし、国家が比較的統制のきくものとして重視されている。

帝国主義段階における教育とは、むしろ今日の危機的状況にあつては、まことに帝国主義支配イデオロギーの貫徹の場でなければならなかったのだ。

だが「ゲバ高校生」の増大に最も鋭く表現されるごとく、その意図は破産しつつある。しかも不貫徹ならしめる要因はいぜんとしてつきない。反戦高協を指導部とする高校生運動の奔流は底をつきないものとして次々に流出せんとしており、企業家あるいは国家の統制にしたがわぬ反戦派教師が逆に登場し、高校生反乱は帝国主義者に二重の恐怖をつき出している。一つは帝国主義教育の破綻、あと

本格的に公教育を行なっていた。

死滅しつつある資本主義である帝国主義段階における高校教育は、系列的な科目の設定、たとえば自動車産業の要請としての自動車設計科等を整備し、さらに侵略する為には無条件に賛成を国民的合意とし、国家意志の統制下におくためのイデオロギー攻撃の場とせしめ、さらに個々人の生き方を最終的に、反動的に決定する場が高校教育の本質に他ならない。そうであるが故に政治闘争を行なう革命的学友を処分しなければならぬし、それでもあきたらないとみるや（むしろそれ以上の恐怖の現われとして）学警協力体制を文部省通達という名のもとに構築し、官憲、私服、当局の三位一体を軸にわれわれの闘争を圧殺してくるのだという事をはっきりと確認しておかなければならない。

帝国主義段階におけるブルジョアジーは、自己の支配の終えんをすでに自覚しており、未来に何らの希望ももち得ず、ただ現在にしがみつき現状維持に窮々としているが、現在の高校教育はその彼らの姿勢と意図に徹頭徹尾染めあげられているのだ。だが、彼らに未来がないからといって、未だ若いわれらが未来をもって何故悪いのか！いわれたとりの枠の中で努力さえすれば、「偉くなり」「金持ちになり」「幸福になる」と教えている当の教師や大人たちが全く「偉く」なく「金」を持たず、「幸福」でもない現状をまざまざと見せつけておきながら、何が「教育」というのか。

六九年階級闘争の場に反戦派労働者、全共闘学生、三里塚農民と共に公然と姿を現わした高校生の闘いは、かかる死に類している帝国主義の根底的動搖と破産に起因していたのであり、当然のことながら、帝国主義に対決し打倒していく闘いの中のみその活路を見

出せるものなのだ。

だからして以前の「仰げば尊キ」教師の幻想は一本んにくずれ去り、「ゲバを仰ぐ」対象にとってかわり、「君が代」とする時代は終わり、「われらが世界」を創出すべき時代に変わりつつあるのだ。かくして六九年高校生の反乱・バリケード・闘争参加は爆発的に勝ちとられた。

「うまでもなくこの過程は容易なものでは決してなく、最初は自己の常識の哲学を打ちこわす必要がある、「多く金をとれるサラリーマン」といった自己の色あせた進路を打ちこわし、家族のしめつけや教師の煽喝から逃避することなく闘うことが必要であった。われわれは、腐敗せる帝国主義の支配に怒りをもち、自己がかつてはその支配を結局は認めていたことに怒りを覚え、起ち上がったことを決して忘れてはならない。だからこそバリケードの意味は深く、バリケードこそ闘争の一切を象徴していた。物質的な意味におけるバリケードはなくとも、自己の胸中に強固に築いた、現在を否定し、革命を志向する内なるバリケード思想は、帝国主義者といえども破壊する事は決してできないのだ！

(2) 「反乱」から方法の獲得へ

闘争は今新たに開始された！

反乱の炎は革命の思想によってさらに強烈に吹き上げなければならぬ。さらにきびしい訓練にかけなくてはならない。今まで通

闘いは鎮圧されるものであり、革命への発展はありえない。ましてや六八年高校生反乱の単純な固定化や延長線上に変革を夢みる諸君は論外であり、ともすれば「逃避」がいやで運動を起したものが、その運動の中に安住感を作り、逆に逃避の場を見出す諸君（ノンセクト・ラディカルと自称する諸君や、そうした考えにシンパシーをいだく諸君たちへ！）は早急に自己を点検すべきであらうと思う。確かにバリケードは、われわれを既存の束縛や規範から一瞬間たりとも解き放ち、解放感を与え、そこで知った本来の人間関係の予感に感激させる。だが、そこも決して安住の場でないこともまた事実だったのだ。むしろわれわれは、六九年で高校生が知ったこの闘争の喜びと苦しみとが、帝国主義者を異常に恐怖に陥こんでいることを見ぬき、内乱の七十年へ向って、社会的反乱として自己を貫徹していかなくてはならない。

しかもわれわれは、闘いの喜びと苦しみだけでなく闘いのやり方まで覚えてしまった。誰が敵で誰が味方かもわかってしまった。いまこそ四月六月安保沖縄決戦にもうひとつ大きなうねりをつくりだし全高校生を圧倒的に立ちあげさせ主導すべく政治闘争の先頭に起たねばならない。

迫りくる革命の現実性は、われわれに重大な階級的役割を要請している。もはや一片のちゆうちよも許されない。歴史の幕あけを自らの手で担う事を誓おうではないか。

りのやり方からさらに、非公然的な、非法的な、あるいは公然とした、合法的な闘いを多様に駆使しなければならぬ。敵は帝国主義者と学校当局は様々に弾圧を開始している。大衆と活動家の分断、家族への煽喝、刑事の尾行、教師によるピラのとりあげ、処分攻撃が高校生という未来を意味する存在であるが故に、狂気の如く今かけられている。この攻撃を受けとめ、はねかえすのは誰なのだ。この僕であり、君たちなのだ。敵がわれわれを大衆から引き離そうとするならばわれわれは、ありとあらゆる手段をもって全高校生と結びつき、刑事の尾行には革命的警戒心をもち（何んでもないのに尾行と錯覚し、家にとじこもりばなしでは反革命になるぞ）、うまくなまき、ピラのとり上げには、断固として、反対し実力防衛を貫徹し、逆にハレンチを教師を弾劾せよ。そして切りふたである処分には、確固たる闘争の自信（思想の貫徹）をもってのぞみ、全高校生に呼びかけ、共通の課題として闘いを組織せよ。それでも当局が撤回しないならば、あとは実力行使するのみであり、処分を恐れぬ気構（最後の、決定的な事だ）をはっきりと顕示し、自分一人になっても闘う事がきわめて重要である。処分されても闘いはどこにでもある。そうした自己を確立する事が反撃の第一歩である。闘争とは実に様々な方法をわれわれにおしえてくれるのだ。単なる反撲をくりかえすばかりでなく、敵は帝国主義者のねらいがどこにあるのかを分析し、どういふ組織を作ったら闘争が永続するかを学び、常に自己を革命の思想の中におかなくてはならない。常に自己が革命的であるためには、毎日の活動を点検し、全高校生への呼びかけ（ピラ入れ、オルグ）、政治討論（会議・学習会）、財政の維持（カンプ）を行なわなければならない。そうした方法を獲得しない限り、

<2> “怒り”を組織し高校を革命の砦とせよ！

六九年に爆発した高校生運動の主役われわれは生まれて以来十数年、支配者階級の物質的基盤とその従属としてのイデオロギーの中で支配者階級と同じ思想の下で生活してきたが、帝国主義高校教育が一層、緻密かつ細分化の一途を進む中で全く非人間的な扱いをうけ、その矛盾の認識はすなわち自己の階級的存在の認識であり、もってはじめて怒りを爆発させるゆえんとなったのだ。

六九年高校生反乱は、日本の帝国主義が日米共同声明「アジア侵略宣言」を行った十一月をその頂点として闘われ、帝国主義が侵略を開始するためのイデオロギー的支柱を形成せんとし、教師を介在させ、帝国主義者にとって「良い子」を作らんとしている事への拒否であり、その事を通して政治参加、デモ組織者の契機を作り出していった。対象変革と、自己変革の連関は今やすべての高校生の日常的課題となっておりかつてのブルジョア的価値観の崩壊へとつき進み、新たな階級意識（プロレタリア的存在）を自覚させていった。この事は、帝国主義者を恐怖のどん底へおとしこめざるをえない。いま帝国主義者はアジア侵略にむかって革命的左翼とそれを軸とする新しい運動の一端を必要としている。

だがわれわれ高校生の闘いの爆発はいまや抑え難く歴史の必然である。何故なら既にわれわれは闘い以外の何の権威も何の信頼も何の未来も見出すことはできないからだ。しかし、この高校生の闘いの爆発は数年先の日本の社会を決定的に破壊する爆薬庫に等しい。

既に今春、かの山崎君虐殺に象徴される十・八羽田闘争を一年生で迎え、日大闘争、東大闘争の爆発と新宿騒乱闘争とを二年生で迎え、そして十一月決戦と高校生の総反乱を三年生で経験した先輩を社会の至る所に送り出した。工場に、官庁に、大学に、農村に、自衛隊に、その他社会のあらゆるところに、三年間の経験豊かな高校生が入っていったのだ。高校生は自衛隊員にもなれる！国鉄労働者にもなれるしさらに言えば、国家機関の中核にまで入れる！考えても見よ、革命的高校生全てがこうした戦線に配置された時を！

七〇年代は第二第三の小西を生み出し、軍隊内部を分裂させ革命軍にもできる。まさにこれからの時代の方向は高校生の手に握られているのだ。言わば火のついた今日の高校は革命の学校となりつつあり革命の緊迫性に応えるべく革命の貯蔵庫たる使命が要請されている。「子供だから」とか「まだ知らなくてもいい」といった時代では断じてなく、全人民的課題「革命とは、全ての人民を革命の参加者とする」ことであり、文学通り高校生は何にも優れる若さと、はつらつさ、真面目さをもってあり、飛躍的人間であり、戦闘力は底知れない。我々の高校を一つのこらず革命の波で洗い、高校を安保粉碎、日帝打倒・沖縄奪還の闘いの砦「革命の貯蔵庫とせよ！」

<3> 四〇六月全ての高校生は 政治斗争の先頭に起てよ

わが反戦高協は、一〇・八羽田以来二年間の闘いの中で、反戦派

日帝の危機の全面的開化は、人民全てにその矛盾を押しつける事となり、七〇年一月、二月は全軍労働争爆発、三里塚農民、少年までをわがプロレタリアートの下に結集させるものとして現出し、さらに長き王政の下、とりわけ在日少数民族への非人間的抑圧と、部落民への差別を日常とする時代は帝国主義の危機と同じくして、革命的爆発の様を呈している。

そして高校生が等しく労働者階級とスクラムを組む時代、これが七〇年と七〇年代であることを喜びをもって自覚しなければならぬ。もはや一人の高校生でもノンポリであってはならないし、ノンポリなどといって喜んでいられる時代は過去の遺物とさえなろうとされているのだ。

現実から逃避してはならないとし、先進的高校生によって担われてきた高校生運動は、ともすれば運動の中に自己を安住させ、逆に逃避の場所としてしまし悪しき傾向を保持していたが、このような傾向は断乎として止揚されるべきであるのだ。

運動の中に自己を置き、社会変革を自己の生きがいとし、社会的実践の中で真に生きる道を見出さなくてはならない。

運動は決して補助的なものではなく、とりわけ七〇年代は断じてそうではない。毎日毎日の生活の中で思考し、実践しなくてはならないものとして闘争は展開されるのだ。

そうでなければ、敵の弾圧の前に一切打破されるであろう。今は破防法時代であり、高校生といえども帝国主義国家は弾圧を差別しないのだ。したがって一時的な闘争組織は日常的な、しかも強固な組織にとつてかわらなくてはならないし、今までのような、一人よがりの反戦から、組織的な階級的な暴力の複権を築きあげ、

労働者、全学連との連帯をかちとりつつ「革命の現実性」を常に語りその認識に基いて息つくひまなく闘ってきた。そして11月決戦を打ち抜いた今日、われわれは、日本革命の緊迫性をはっきりと射程にとらえ、日帝打倒の環をこの手につかんでしまった。まさに「革命の現実性」は、闘う主体の執念の中にあり、これからもそうである。しかしわれわれは11月決戦の勝利の中で、今や、その闘う先頭部分の中にあつた「革命の現実性」を全てのプロレタリアート人民が自分のものとする第一歩とすることに成功したのである。われわれの任務は鮮明である。今まで以上に「革命の現実性」「日本革命の緊迫性」を情宣しなければならぬ。すでに十数年の間、帝国主義との死闘を展開しているベトナム人民は、今日のことかと、帝国主義本国プロレタリア人民による帝国主義打倒を待ち続けている。さらには、(スターリン主義者によって今日、その革命を変質させられたとはいえず)すでに五三年前、ロシア帝国主義は打倒されている。われわれはこの四〇年間の空白を無駄にすることなく、痛苦の怒りを帝国主義打倒の力としなければならぬ！そして、その一切のカギは、われわれ高校生一人々々の手に握られているといつても過言ではない。

日帝は、これまで沖縄を米帝の分離的軍事支配によってアジア危機の国内への波及をくいとめてきたのであるが、日米共同声明によって今後は、日帝が沖縄を本土へ「抱擁」し、維持しなければならなくなったのだ。そのことは、アジア危機の集約点「要としての沖縄の矛盾、危機を（したがってアジア危機を）日本階級関係の中に構造化したことを意味している。つまり城内平和のない日本にアジア危機を持ち込む事となった。

自己のものとしなければならぬ。

平和的階級闘争の時代は終わり、死にあえぐ敵を見、革命の現実をはっきり認識する中で、自己が歴史的な人間——プロレタリアートの時代に向かう一員として、行動原理を確立しなくてはならない。もって激動を準備し、全ての高校生を主導し抜くためには、大衆と自己を区別すると同時に、大衆の中にはいり、大衆の意識——常識の哲学に、マルクス主義を大担に持ちこみ、大衆と自己との熱き交通形態を創りあげ、大衆から学び、また逆に大衆の真に望んでいるものを革命的に引き出さなくてはならない。

われわれの望む帝国主義打倒は、全高校生への11月闘争の持ち込みであり、浸透であり、このことは意識的な働きかけの行為によってのみ成しとげられるものなのだ。クラス討論はその最良の方法であり、また自己の練磨のいいチャンスである。この実践が貫徹されない限り、ブルジョアジーに対する軽蔑感と、プロレタリアートに対する劣等感にはさまり苦しみ続け、自己の出身階級に対する罪悪感を宗教的にしか表現できないであろう。

帝国主義者の意図するとしにいかかわらず、全面的危機は開花しており、その苦しみの表現がわれわれに対する狂気じみた弾圧と、11月闘争への報復としての長期拘留、実刑判決であるのだ。七二年沖縄「返還」は、人民タブラカ政策であり、その破産は七〇―七二年における「沖縄奪還」の闘いの中ではっきりするだろう。沖縄県民と日本プロレタリア人民の闘いの爆発は今からしても全くはつきりとしており、われわれはしたがってその一層の危機を待っているわけにはいかない。侵略とは内乱を志向する全ての人民をたたきふせてはじめて可能なのだ。内乱か侵略か、こうした時代として、

七〇年代とりわけ四一六月安保沖繩決戦をトントン闘い抜く必要がある。

四・二八沖繩奪還闘争は全人民的課題であり、全ての高校生が眠りからさめ、街頭をうずめつくすこうした闘いでなければならぬ。七〇年代高校生運動の先端を担う一人一人は、具体的には侵略を担う一員としての自己を否定しなければならぬし、さらにそのベクトルを社会変革への実践におきかえてゆく事によって倍化させていく、こうした最も根底的な社会的実践の中で学習！共産主義原理の把握に基く帝国主義打倒こそ、学習であり、生活は闘争である。これを高校生運動の原点としなければならない。故に政治活動への規制干渉・禁止・弾圧を粉砕することは、われわれの生きる道であり、全国高校生が政治闘争の先頭に起つ、この事が高校生運動！社会的存在としての自己の発現に他ならない。弾圧には反撃を、そして帝国主義の危機をさらに押しすすめよ。

日帝にとつての致命的環、安保体制の粉砕、その実体的支柱、沖繩を日本プロレタリア階級のもとに奪還せよ！

こうした闘いは四一六月全都に無限の人民を結集させることによつてはじめて可能であり、とりわけ自己の思想を大衆＝常識の哲学にぶつける中で自己の思想を強固に構築し、かつクラスを革命的に組織しなすし、沖繩を、高校教育を、マルクス主義等を、積極的に討論の中で「生きたもの」としななければならない。

革命とは、まことに生活のすみずみまで浸透するものであり、われわれを含めて全ての大衆の不満・怒りを集約し、爆発させるベクトルを内包し解決するものなのだ。革マル派のオモチャ＝反戦高連の平和ボケをのりこえ、ML系諸君の日和見主義、屈服をわれわれ

の教訓とし、全ての高校生、反戦高協第二回大会に結集された全ての先進的高校生諸君は、四一六月安保沖繩決戦を闘う準備を全て担い、洪水の如き大衆の街頭に登場せしめようではないか。

四一六月全人民的高揚によつてもたらされる政治激動は、佐藤内閣を決定的危機に迫りやり、ブルジョア支配の動揺をもたらすであろう。万国博や国際連合総会で、「大國日本」の威信を確立しようとかやっきになっている佐藤内閣の足もとで、学校や警察や自衛隊では抑えのきかぬ政治的激動が到来し、「返還が決定した」と全てが終わったかの如きベテンをもつてすりぬけようとしている沖繩で全軍労の闘いが火を吹き、そしてそれが沖繩の教育の帝国主義的反動の中で、教職員会と沖繩高校生に燃えひろがるならば、佐藤内閣の破局は明白である。

四一六月全てを投げうって、憎むべき既存の体制・東ばく・規範を拒否し、闘い圧倒的高揚をつくり出そうではないか。

六九年、ほんの一寸高校生が腰を上げただけで支配者は驚き、教師はあわてふためいてやっきになっている。七〇年、われわれは本格的一步を踏み出すのだ。そしてわれわれが一步を踏み出すことがどんなに恐ろしいことか思い知らせてやろう。高校生を先頭とする闘いで打倒された南朝鮮の李承晩の悪夢を日本の支配者階級に再びよみがえらせてやろう。ベトナムやアラブで闘っている高校生と同じ質を、われわれ日本の高校生も持っていることを思い知らせてやろうではないか。

高校生が、ひとたび大衆的に闘いに起ち上がるならば、その打撃力たるや大学生の比ではない。全ての高校生は六月安保決戦の闘いの先頭に起とう！ 未来社会の夜明けをわれらの手で切り開こう！

炎の学園から日本革命へ

永続的・非妥協的に燃え上る青山高斗争に続け

藤 岡 一 昭

(青山 全 共 斗 書 記 局 員)

目 次

はじめに

永続斗争宣言

第二章 徹底抗戦の革命的意義

内乱的死闘の七〇年代へ、

第一章 十・二一徹底抗戦への

第三章 高校生は政治斗争の先頭に

アプローチ

起て

アメリカ帝国主義のベトナムに於ける致命的敗退、そしてIMF体制の崩壊の状況といった帝国主義の歴史の終焉を告げる諸矛盾が、戦後世界体制の根本的動揺をさらに決定的なものにしようとしている中であって、日米共同声明によって明らかにされたように、今や日本帝国主義は沖繩と三里塚を両軸に着々とアジア侵略への「破綻の」地固めを開始している。

一昨年、昨年の東大、日大を頂点とした第二次学園闘争は、そのような帝国主義の世界史的危機の中で、戦後二十数年間の帝国主義文教政策を根底的に打ち破り、破壊の思想に日本帝国主義打倒の闘いを、はっきりと学園の中にもちこんだものであった。「大学を安保粉砕・日帝打倒の岩とせよ」というスローガン以外にそれを端的に言い表わすものはなかったのである。

そして昨年、卒業式闘争を契機に、9月以降のわが青山高校の闘いを「突破口」と「頂点」とした全国高校闘争が、問題の本質を帝国主義そのものにおかざるをえないものとして、徹底した非妥協的、永続的たたかいとして展開されていったのである。

一部の諸君は「教育論も運動論もなにもない、たいては意味のある闘争ではない」とわかったようなことを言っているが、そもそも帝国主義の矛盾がいたるところで、様々な形をとって表出し、闘争の本質がそこにあるならば、あらゆる矛盾を様々な形で切り拓き、切り拓かれた水路を日本帝国主義打倒の闘いとして大きく集約されるということが全く理解できない証差なのである。われわれは、そ

れを抜きにしたところに、ある整然とした教育論や運動論は必要としな。そして闘争過程や問題の契機の形をとりだし、そればかりを問題に取り上げ、本質的命題「すべての問題は日本帝国主義にあり、日本帝国主義を打倒しない限り一切が解決されない」ということの意味を理解しえないということは、形式主義の観念的な追従でしかないということを明確にしなければならぬ。

わが青山高校全学共闘会議は10・21徹底抗戦以後の強権的弾圧で三十名にものぼる逮捕者をだし、決定的なまでの孤立の中にあって今なお三里塚行動隊を組織し、うちつづく激烈なる階級闘争の中で断固として、たたかひの手綱を張りつづけている。質的飛躍と量的拡大をちとり全てのたたかう高校生との連帯のもとに、安保粉砕日本帝国主義打倒のたたかひへと突きすすまんとする青山高校全学共闘会議は、ここに永続的闘争の宣言と、闘争報告を全てのたたかう高校生に提起する。

—非妥協的永続斗争宣言—

二ヶ月にわたり全都をゆるがし、全国の高校に占拠バケドの嵐をよびおこした青高闘争はいかなる意味においても終ってはいない。そしていかなる状況であろうとも決して終わりを意味するものではない。

戦後民主主義と大学物神にささえられた共同幻想体の中で、一切の政治的権利を奪われ、社会の熾烈なる階級的情勢から決定的に隔

して高校が存在し、そしてわが青山高校も決してその例外ではなくいやむしろ、受験校としての、すなわち日本帝国主義の支配する側の人間を多く送り出してきたという事を、われわれははっきりと確認している。

そして、われわれの闘いのきっかけとなったものも、まさに、学校当局の権力加担、すなわち帝国主義国家権力への法的加担から出発したのである。

日頃、自主と自由を唱え、自己の思想と主義に誠実に生き抜くことを「教育」してきた青高の教師は、青山全共闘の前に、いちはやくその「教育」を放棄し、原宿署に泣きついたのである。一切の自己の思想性を放棄し、「法は守るべきもの」を終始、叫びつづけた教師は、侵略と戦争の帝国主義という体制に埋没するか、全てそれらを否定し、生き生きとした人間の叫びを躊躇なく発し、帝国主義を打倒する側に立つのかという問いかけをつづけた全学共闘会議のその闘いの前に、前者を選択したのであった。

そしてその時、二〇〇の青高生こそ、侵略と戦争、矛盾と不合理の帝国主義を否定し、戦後民主主義の欺瞞のペールをはぎとり、自己否定の立場を明確に位置づけ、わが全共闘の戦いのあとにつづいて行ったのであった。

こうした、大衆の圧倒的支持と決起、そして全共闘の不屈の非妥協的永続的闘争を貫く思想性こそ、戦いを支え、進展させたものにも他ならない。

全都、全国の全ての高校生諸君、諸君らの前に、今また闘いの決意を述べることはしない。それはわれわれの明日の闘いを、七〇年、七〇年代の階級闘争をその高校

離され、それを思考することさえ禁止されるような高校の戦後20数年間の圧殺と欺瞞の歴史は、今大きく揺らぎはじめている。血ぬられた日本帝国主義の教育支配は戦後世界体制の帝国主義的危機を背景に、わが高校階層においても、あらゆる矛盾の解決が日本帝国主義打倒へ集約される事をもって全面的に破壊をきたしてきているのである。すなわち高校闘争の全てが様々な契機を持とうと、それは単に教育的不信、当局の管理者の無能等に対する闘争なのではなく、権力と一体となった教育への怒り、受験、コース別教育等露骨な階級制への不満などから、いかなる人格者も、どんなに人を納得させることのできる人間の全面性と教育理念をもった教育者も説得しえない、そして改良しえない、それ故に階級的非和解性を内包したものである。

榮光の三十数分にわたるたたかい—青山高校全学共闘会議が、一切の政治的軍事的力量を集中した10・21徹底抗戦のたたかひこそ、ものごとくに、そして徹底的に高校闘争の本質問題を明らかにするものであった。国家権力とのそれも圧倒的な国家権力との非妥協的な血みどろの闘いをたたかい抜き帝国主義打倒のたたかひへとやがうえにもおしすすめたのである。

それ故青高闘争はいかなる意味においても終わってはいないし、そしていかなる状況であろうとも終わりを意味するものではないのである。

高校が「階級」の構成、維持を前提とし機能し、人的能力の開発を主眼に存在しているというところ—日本帝国主義のその侵略と抑圧搾取と収奪の中に、それを肯定し、維持し、ささえ奉仕するものと

生戦線の最先頭になって、すなわち四月六月安保神繩決戦において、われわれの不屈の隊列が進撃すること、百万言の代替となるからである。

しかしながらわれわれは、ここに、全国四五〇万高校生の前に、二二〇〇の青高生に対して提起した、つきつめた同じ問題を再度くり返す。

諸君、諸君らは一切の人間の権利を奪われ、戦後二十数年間の圧殺と欺瞞の高校の歴史に、その日常性に敗北し、埋没するののか、あるいは真に人間の叫びを、あらゆる障害を乗り越え発するののか、侵略と戦争、搾取と収奪、矛盾と不合理の帝国主義を維持し構成している高校を、肯定するののか、否定するののか、

全都、全国の全ての高校生諸君、

われわれは今、青山高校を破壊しようとしている。日本帝国主義がその延命をかけて、アジアへの侵略、アジア人民に対して搾取と収奪の経済的軍事侵略をせんとしている、その上にあつて、その日本帝国主義国家体系の秩序の中にあり、それに奉仕している青山高校を破壊しようとしているのである。

全国の高校生諸君、

わが青山高校全学共闘会議とともに、日本帝国主義のその心臓部に、血ぬられた鉄拳をあげせよではないか。

全国高校に総叛乱、総バリケードを、

安保粉砕、日本帝国主義打倒、

われわれの勝利の日まで、共に闘わん、

第一章 十・二一岩死守戦への

アプローチ

一月二一日午前七時三〇分、完全装備の機動隊四五〇名、火焰ビン用防火装備三〇名、放水車、化学消防車が、バリケード破壊のため導入された。

しかし、三項目自己批判要求もともと根源的な、前提的な要求をかかげ、二か月にわたる青高闘争の運動的場所的保障の場として、そして思想性の獲得の場としてあったバリケードは、四日間にわたってのべ三〇〇人もの学友の力で、できる限りの武装を勝ちとり、四名の英雄的学友が、文字通り死守したのである。

ありとあらゆる力をその一点に集中し、机や椅子はもちろん、黒板から床板まで、あらゆる物を武器として、より強いより厚いバリケードを構築し、どこから見ても学校とは思えない堅固な要塞を創出したのである。そして一〇・二二国際反戦デーを前に、続々と首都に結集する全国の闘う仲間と連帯を勝ちとり、機動隊導入を今や遅しと待ち受けていたのである。

こうした中で三〇分間にわたる栄えある闘いは貫かれていった。

第一節 闘争経過

A 青山高斗争前史

△卒闘▽

一・一八、一九、安田岩死守戦を頂点とする、東大闘争、日大闘争に貫かれた「破壊的思想」が、その闘争の完徹そのものを、高校生に突きつけることによって、我々高校生の大学物神をこなごなにつきくずした。そして、そこに始まる「自己否定」の闘いは、高校生の抑圧され一切の政治的自由を奪われた高校生活に対する反逆三年間の高校生活を集約的に表現した、ブルジョアジーの三年間の総括の場―卒業式に対する、その粉砕闘争として全国を揺がせた。茨木、阪南、武蔵丘、都立大付の四校のバリケードは、我々に対して、卒闘への決起を呼び起こさずにはおかなかった。

反戦会議に決集する十数名は、孤立を恐れず闘争を完徹した。

校門前でピラをまき、タテカンを立て、屋上に赤旗を掲げた（全青高では初めての闘いであった）式前の闘い。そして更に、式そのものの中では圧倒的なヤジ、インターを貫徹した。そして式終了後の自主卒業式集会は、三〇〇名以上の学友を結集してちとられた。

大衆からの一定の孤立の中にあつても、断固として思想性を貫き、闘いを貫徹することによって逆に大衆の支持を得るといふ貴重な体験を勝ちとった。

そして、春休みの学習会、入学式闘争は、一切が四・二八沖繩奪還闘争に向けられた。

△四・二八闘争▽

四・二八闘争の大爆発こそ、本土プロレタリアートの沖繩に対する回答であった。全都にわたる八時間余の激闘を、闘い抜く中で、機動隊は霞ヶ関一帯に釘付けとなり、革マル派は闘いから本格的に

一九六九年九月に始まる二か月間の激動の過程の一切を、主体及び客体に保証したのとしてその前史はある。闘いは数々の敗北、組織からの脱落を生みつつ前進してきた。

△六八年六・一五闘争▽

約三〇名がベ平連デモに参加。学校当局から慟悔がかかり、これに対して闘うため、反戦会議結成。しかし、処分は出さず、挫折。

△文化祭闘争▽

全学連委員長講演会を、常任委員会（生徒会執行部）主催で提起。自治会（議決機関）で承認。しかし、学校当局からクレームがかかり、大衆もほとんど中止に傾く。当局と三度の団交の末決裂。反戦会議の体制が整わず挫折。

しかしながら、この闘いの中で、学校当局のその本質が、あばき出され、それ以後の闘いの思想性を支える源となった。

△一〇・二二闘争▽

組織的に取り組めず、青高生三〇数名参加。

一月から冬休みの過程で、以前の反戦会議の解体の総括を踏まえ、その組織性と意識性の確立を目ざして、一月二十一日、二・一一闘争に向けて反戦会議再建。

△六九年二・一一闘争▽

初めて、反戦会議が闘争の一切を支えた闘いであった。二年生を中心としたクラス討論講演会を行なう。拠点クラスにおける同盟登校決議が勝ちとられたが白紙撤回。

当日は、四〇人が反戦会議の旗の下に参加。一名公安条例違反で逮捕。

逃亡した。

前日に、日帝にとって最後の伝家の宝刀とでもいうべき破防法が、本田書記長、藤原反戦世話人にかけられた。このことは、我々の闘いに対するブルジョアジーの回答としてあり、いよいよ破防法時代へ突入したのであった。

反戦会議は、その闘争方針を明確にストライキとしてたて、一路その道を進撃した。始業式より二週間、徹底したピラ、タテ看等による情宣、クラス討論、そして、新崎盛輝氏の講演は、スト権投票の結果、有効数八〇〇の内の二五〇票として現われた。

公然と学園におけるスト、それも奪還ストを提起したところにその意義があった。この闘いに恐怖した当局は前日に、反戦会議の全メンバーに退学の慟喝をかけ、全員の親を四・二八当日朝八時に呼び出した。それらの攻撃にひるまず、授業ボイコットを呼びかけ、全クラスで討論を展開し、拠点二クラスでは、実質的ストが貫徹された。更に夏休みから、四・二八沖繩奪還闘争総決起集会を開催、約五〇名の学友が五、六時間目を通して参加し、反戦高協の学友、四〇〇名を迎え入れた。

機動隊導入の慟喝をはねのけ、青高生二二〇名との討論を行ない五時半、反戦高協四〇〇名と共に、五〇名の青高生は、新橋へと出発した。

我々は、青高闘争の経過を想起する時、この日の闘いから語らねばならない。この日の闘いこそ、一切の弾圧をはねのけ、青高を、「安粉砕・日帝打倒の誓」とする突破口であったことを確認しなければならぬ。

△六・一五闘争V

反戦会議のメンバーが五、六名に減少する中で、この闘争を迎えたわけであるが、我々の掌握しない学友が続々と結集し、その隊列は一〇〇名を越えるにおよんだ。

これ以後闘争は停滞し、一時的退潮期を迎えたが、夏休みにおける約三〇日間、三〇時間以上の徹底した学習会を行ない、理論深化政治武装を克ちとり掛川闘争へと決起していったのである。

B 校長室突入・占拠

八月三十一日、青高生一〇名は、掛西闘争勝利全国高校生総決起集会に参加した。

六・八アスバック闘争に決起した静岡県反戦高協に結集する学友に、静岡県教委は、ただデモに参加したという理由で処分を加えてきた。処分は全県下三十数名にわたり、中でも集中的に掛川西校にかけられ、反戦会議に結集する七名の学友が無期停学となった。

これに対して、闘っていた学友に対して、更に七名のうち六名に退学、二名に無期停学を加えてきた。

この静岡県における大量処分は、六月中旬に文部省から指導手引書の実質的攻撃としてあった。従ってこの処分を許すなら、全国の高校に同じような政治的処分が荒れ狂うのは必至であった。

この処分攻撃を全国の高校生にかけられたものとしてとらえ、この闘いの頂点たる掛西闘争に我々は決起したのであった。

全国から結集した二〇〇名の反戦高協に結集する学友は、断固としたデモンストレーションを先頭に立って貫徹し、掛川の町を闘い

のるつぼとさせた。この中で、ロックアウトをして機動隊五〇名を待機させるといった当局の弾圧を打ち破り、鉄条網を張りめぐらされたヘイを乗り越えて七名の学友が校舎に突入した。

その中で青山反戦高協の一員である佐藤君がその最先頭に立って突入したのであった。

△九月一日V

始業式が各教室に分散して行なわれる中で、三〇人で報告集会貫徹。

△九月二日V

学校当局が佐藤君の母親を慟喝し、母親と教頭が掛川に行ったことが判明。

完黙している彼を権力に売りわたす行為を糾弾すべく、学校当局に五項目質問を行なった。そして、この闘争を契機に全闘委を結成。

「五項目質問」

- 一、 教頭は何をしに掛西に行ったのか？
- 二、 静岡県大量処分をどう考えるのか？
- 三、 文部省指導手引書についてどう考え、どう対処するのか？
- 四、 佐藤君の処分はどうするのか？
- 五、 生徒規則十一項についてどう思うのか？（十一項とは、掲示物の届出、放送の許可、集会の届出を定めたものである。）

これに対して、我々のマイクを通して「回答せよ」の声の前に、校長は校内放送を通じて

・ 教頭は事情を調べに行った。

・ 指導手引書は研究資料であり参考にする。

との、居直りと欺瞞に満ちた回答を行なった。

これは、我々の質問には完全に答えておらず、逆に居直っていることを糾弾すべく、再度正当な回答を要求した。

これに対して学校側は黙殺の態度をとった。

△五日V

学校当局のこのような対応に対して、更に我々は、六項目要求を行ない、八日までに、大衆団交に応じるか否かを迫った。

「六項目要求」

- 一、 教頭は掛西へ行ったことを自己批判せよ。
 - 二、 五項目質問に誠意ある回答を行なわなかったことを自己批判せよ。
 - 三、 文部省指導手引書を廃棄し、文部省に抗議せよ。
 - 四、 佐藤君の処分を出さないことを確約せよ。
 - 五、 生徒規則十一項を撤廃せよ。
 - 六、 以上の五項目を大衆団交で文書をもって回答せよ。
- しかしながら学校当局は、何の回答もせず、我々が指導課に問い合わせると、「全闘委は非公認団体である。従って答える必要はない」との一点張りであった。
- 更に我々は、十日までに回答するよう最後通告を行なった。

△十日V

放課後五〇名の学友を結集し、大衆団交要求集会を行ない、学校側の回答を待つ。

しかし、何の回答もないまま、職員会議におしよける。「まず帰って回答を待て」とのことで集会を続行。四時半頃、「きょう中には結論を出せない。明日回答する」との指導主任の回答あり、一定の追求をした後解散。

△十一日V

再度集会。学校当局より回答なし。

△十二日V

回答を求めるとく昼休み、大集団交要求集会を行ない、全闘委十五名デモのまま校長室突入。しかし、回答を迫るべき校長は全闘委に恐怖して姿を消し、校長室はも抜けのから。その時点から占拠は続けられた。全闘委を支持する大衆が、教頭の「退去せよ」との管理者的対応を非難する中で占拠続行。

三時すぎ、指導課主任他五名が、「大衆団交には応じられないがお互いの代表者間の討論を行なおう」との案を持って来たが、ボス交でまるめ込もうとするとしてこれを粉砕。

七時すぎ、今度は、「大衆団交ではなく、生徒集会を」という案を持って来たが、これも粉砕し、占拠続行。

九時すぎ、占拠中の全闘委の全メンバーの両親を呼び出し、家族帝国主義を用いた闘争圧殺を行なわんとしたが、これらはねのけて占拠続行。

十一時。校長室の戸を破って教師二十数人、父兄が突入。父兄が間にはいり、教師と論争。

午前二時、教師を完全に論破、占拠を黙認せざるを得なくなり、半合法的に占拠続行。

△九月十三日V

占拠続行。

「十五日よりの文化祭を破壊するために占拠をしている。文化祭を行なうために占拠をとかせようと。」との学校当局のデマ宣伝を粉砕してクラス討論を展開。文化祭委員会において、占拠が続行さ

れていても文化祭を執行するという決議が勝ちとられた。

午後三時。ついに校長が校長室に現われる。しかし大衆団交を拒否したため、校長室から退去させられる。校内、校舎でデモ完徹。

△九月十四日V

朝から校門の検門を実力で完徹。

午後三時。最後の交渉を行なうことを要求、無視される。(この時点で機動隊導入は決定されていた)全闘委は、これを先取りし、午後七時より校長室にバリケードを構築。

午後九時。青高生七〇名がいる中で校長が一方的退去通告。第一回機動隊導入。全闘委一名逮捕。ロックアウト。

これに抗議して、全闘委及び一般生徒五〇名校門前でデモ。機動隊に蹴ちらされる。一名逮捕、即時釈放。

△九月十五日V

九月十四日の事態に抗議する青高生四〇〇名は朝明治公園に結集し、抗議集会を克ちとり、さみだれデモで青高へ。更に午後一時校門を突破。これに恐怖した学校当局は第二回目の機動隊導入。多くの学友が暴行を受け、数十名の学友がケガ。

○ バリケード封鎖

学校側が開催しようとした日本青年館が管理者に使用を断わられる。このため各クラス毎の担任からの事態説明。

午後二時より、六〇〇名を結集して抗議集会。学校当局との交渉によりロックアウト中の学校内において、「校舎内にはいらない。五時以後は使用しない」の条件の下開徹。

一年のクラスを中心に、事態説明がデッチあげをもって行なわれていることを暴露。しかし学校当局は青高ナショナルリズムを利用し、歌満的に生徒の同情を、「機動隊はほんとうは入れたくなかったが、しかたがなかった。我々は君たちを見てると苦しい。できるだけロックアウトを解除したいと思っている。」といった形で促して解決を図らんとした。

しかし我々は、これを断固粉砕して、おりしも釈放されて駆けつけたF君の声と共に学校当局を追求した。五時になって集会が打ち切られる中で全闘委は、ロックアウトを打ち破るためにそのまま残ることを宣言し、大衆に呼びかけた。しかし大衆はこれに反発。

学校当局はこれを見て、翌朝八時にロックアウトを解除することを決定。

△九月十七日V

三項目自己批判要求。

一、機動隊導入を自己批判せよ、

二、ロックアウトを自己批判せよ、

三、文化祭一方的中止を自己批判せよ、

を掲げ、一〇〇名にのぼる抗議集会を早朝、降りしきる雨の中で貫徹する。

午後九時。全闘委を先頭に一二〇名の青高生はデモをもって全学集会に突入。

学校当局の警察と一体となった本質を暴露し、右翼学生の時おりの発言は大衆的ヤジで粉砕し、学内における全闘委のヘゲモニーを確立。

△九月十八日V

前日と同じく全学集会。

多くの闘う学友を獲得し、全闘委を中心に三年の各クラス闘争委一、二年学年闘争委結成の準備を進め、全共闘結成。

△九月十九日V

午前・全学集会。

午後一タテ割りH・R (各学年クラス数が同じクラス、例えば一組が、三クラス合同で行なう)

六名の学友、三項目要求を掲げて職員室でハンスト決行。

△九月二十日V

タテ割りH・R

このタテ割りH・Rで、全共闘の強い三年だけでなく、一年二年もオルグする。教師に対する幻想は打ち砕かれたが、我々にも一定の反発を示す。

△九月二十二日(二十七日)V

一週間全学集会。タテ割りH・R。授業は全面的粉砕。

二十二日、学校当局は「決意と反省」なるパンフレットを配布。

「機動隊導入によって引き起こされた事態については反省し、導るが、導入自体はしかたがなかった」として、「これ以上粉砕を拡大しなければ処分をしな」と逆に居直った。

これに対して全共闘は、一切の責任は学校当局にあり、三項目自己批判を行なうことが前提である。と真向から対立。生徒集会室をバリケード封鎖。拠点とする。

後半にはいり、当局は授業再開を月曜に強行しようとした。

これに対して我々は三年で全クラスでスト権確立、また自主講座を行なうことを決議。また、三項目自己批判要求署名。三〇〇名集

まる。

二十六日。この日までにハンスト六名全てドクターストップ。三人入院。

二十七日、高安共闘結成大会に五〇名の隊列をもって参加。

八月二十九日V

「三項目自己批判要求貫徹・授業再開阻止」を掲げて、六時三十分より三年八教室バリケード封鎖。全共闘五〇名、機動隊導入の働喝を付けて集まって来た大衆の前で、武装デモ貫徹。

再開は粉碎され全学集会。全共闘は分裂集会。

D 全学バリケード

八月三十日、十月十二日V

その後、授業再開は延期されたが、なしくずし的に一年から再開する動きが出る。これに対して全共闘は、断固として闘った。

この間、一部良識派による「有志連合」なるものが結成された。その主張は、「学校当局の全共闘に対する対応にその粉碎の原因がある。しかし、全共闘も少し行きすぎだ。早く問題解決を行ない、授業を再開すべきだ。」というものもあり、我々の提起した問題を何ら主体的にとらえない諸君であった。

この有志連合が中心となって「大衆折衝」なるものを、全共闘と学校当局の間にはいつて行なうということが、自治会において決議された。(我々の大衆団交は、これにわずか及ばなかった。自治会の多数はこの有志連合が占めていた。

これによって、七日から三日間、大衆折衝は行なわれた。

しかしながら、この場においても、全共闘と学校当局は真向から対立。その続行をめぐって九日全校投票。四一六対四〇八で中止決定。(この間、自主講座を行なう)

一〇・一〇闘争。

約五〇名デモ参加。学校前がデモ・コースとなり、無期限バリケード下行中の立て看と、部室屋上でうち振った赤旗は、一〇万のデモ隊に圧倒的な拍手で迎えられた。

また同じ日、父兄会が行なわれ、全共闘を排除し、全共闘の父兄を発言させない状態の中で当局の計画に授業再開の決議が行なわれんとしたが、我々が体育館の二階から突入し阻止するや、すぐ会は中止、散会した。

八月十一日V

学校当局は十三日よりの授業再開を強行せんとする。これに対してクラス討論、自治会で大衆折衝の練り直し、「大衆交渉」を十三日より行なうことを決議。

八月十三日V

全共闘三〇名により、残り二十二の、普通・特別教室バリケード構築。授業再開はまた延期。

校庭で学校当局の手による全校集会、介入。学校当局は、「バリケードをとけ!」「全共闘は退去しろ!」とマイクを使ってアジる。これが退去通告であると勘違いし、全共闘は徹底抗戦者を除いて退去。このため手薄になった部分からバリケードが解除され、最終的にまた三年八教室のバリケードのみ残る。

八月十四日、十七日V

授業が部分的に再開される。(なしくずし的に)これに対して、四

教室を一つずつのバリケード封鎖決行。教師・大衆との暴力的対決となり、うち一教室にバリケード構築。

バリケード内の講座、一・二年の一部授業という平和共存形態が現われる。

八月十八日V

この日までに学校当局の「一〇・二一に、青高にバリケードがある」と機動隊が捜索に来る。だから、全共闘に自主解除させよう。」とのベテンに動かされ、一・二年十一クラスから自主解除要求決議あがる。

このような動きの中で、機動隊導入は必至であると判明。

徹底抗戦・碧死守を全校生徒に呼びかける。

全共闘会議において、フロント・革マルが徹底抗戦に敵対。反戦高協の圧倒的ヘゲモニーの下、全共闘三〇名夕方よりバリケード拡大。校舎西半分及び屋上へ通じる三通路封鎖。さらに校門にバリケードを築く。

(反戦高協第二軍団五〇名支援に来る)

八月十九日V

機動隊を今や遅しと待ち受ける。しかしながら、機動隊はやって来ない。第二軍団三〇名午前八時よりバリケード拡大強化。

M工派、徹底抗戦より逃亡。

機動隊、放水車・装甲車etc十台、学校付近に待機。

(機動隊導入を十八日夜行なうことが学校警察の間で決定されていたことが後判明。教育庁は再度の闘争爆発を恐れこれを断念し、慎重に一〇・二一に対して外人部隊が泊り込みを行なっている学校は機動隊を入ると発表。東京新聞etcに「青高、バリケード拡

大。外人部隊泊り込み」と導入への布告打たれる。)

八月二十日V

機動隊またしても来ず。

更に全学にバリケードを拡大強化。

学校当局は、三十一日までの三日間休校と発表。報を聞いて駆けつけた青高生一〇〇名校門前に集まる。

八月二十一日V

ノンセクト諸君の脱落の中で午前七時三十分より、反戦高協の戦士四名徹底抗戦。一〇・二一闘争の突破口を切り拓く。碧外において街頭戦を行なった学友五名逮捕。ロックアウト。

午後一時、青高全共闘、反戦高協第二軍団七〇名校門を突破し奪還闘争貫徹。四度目の機動隊導入。六名逮捕。

これに恐怖した学校当局は、「タイム・リミットのため授業再開する。」との言動にもかかわらず、二週間ロックアウト。学校中に鉄条網を張りめぐらし、校門に強固な逆バリケードを築く。

更に全共闘の中心メンバー六名指名手配。

(後に三名逮捕)

学校当局は、授業再開を強行。右翼ガードマン、警察のバトロールの見守る中、入校証を持った者のみが入校できる体制を築き、全共闘のメンバーに対しては、「今後、何も致しません。」との確認書を、家族帝国主義を利用して出させる。それをかけた十七名に退学含む処分。(二名後に追加)

その後、全共闘のメンバーが入校できないにもかかわらず、あらゆる手段を使った抵抗が三年を中心に行なわれ、十一月二十八日、実力で校門バリケード粉砕。

第二節 成果と教訓

A 10・21徹底抗戦までの闘いは、全ての面で、我々が権力に対していかなる立場をとるのか、という点で最もよい教訓を与えた。

反戦高連1彼らは10・21以前全く組織的活動をしえず、バリケードの外でソツと観ているだけであったが、まず初に彼らはその過程で脱落していった。

若死守の闘いを提起した我々に彼らは非謗中傷を投げ去っていったが、全ての全共闘に結集した学友は、彼らをはっきりと日和見主義者と位置づけ、赤テープを反革命の印として確認した。また本質的には賛成だが現在『する』ことについてはわからないという部分は、終始権力の弾圧を恐れ、全共闘の組織を「大切」に思っているものであり、そもそも全共闘そのものの本質が支配階級に対して断固として闘い、屈服することを断固拒否するといったところにあることを明確にする位置づけがでえなないのである。

若死守という闘い、それによって予想しうる狂気じみた弾圧、処分等に目先が奪われ、それによって切り開かれるであろう闘いの地平、日本帝国主義打倒の思想と、闘いに目の届かない近視眼者に他ならないのである。

若死守という闘いの前に、闘う主体はよりすぐられ、多くの闘争

への告発は、一方において教師の造反を求め、権力との暴力的対決を通して日本帝国主義打倒の目的意識追求へ高められるのである。であるが故に自己批判―権力への告発というシエマで自己批判することによって帝国主義打倒の革命への闘いの切り口となるのである。

第三の問題は、教師という座に職もまた階級性を露骨に帯び、圧殺されたものであるという点である。

反戦派教師が統々と決起するということもその現われなのである。しかしながら教師の闘いへの決起を断固として追求するが、権力と一体となって自らを合理化し、反動の極に自己を位置付ける教師に対しては、徹底的に追求し弾劾し、粉砕することによってむしろそういう方向の追求こそ本質的に教師の自己の圧殺された場を明確にし、決起する早道となるのである。

C こうした三項目自己批判のもつ本質的追求は、青高生に対してバリケードの内に入るか外に出るかといった問いかけを最も本質的問題、ブルジョア階級社会を肯定するの可否かといった形で提起したのである。

バリケードは、そもそもそれ自体で特殊的な意義はない。結論的に言えば、そのバリケードは安保粉砕・日帝打倒といった方向性を獲得し、実践的に闘いを展開しうるのか否かに存在の価値が掛かっているのである。

我々は自己否定といった形で日常性を拒否し、それに埋没していった自己を告発することを物質的に展開することが反帝国主義の闘いと一致する時初めて歴史的的生命力を獲得し得たといえる。それ故日帝打倒そして革命へといった志向性を持たず、その域を克服しえな

主体は強化され、日和見主義者は日和見主義として本質を明らかにしていった。そして9・12に校長室突入闘争から、非妥協的闘争をもじどおり先頭を担いきった我々こそ、まったくその闘いに主体的にかかわり、その闘いの正しさや価値を提起したのである。

B 我々の提起した問題、すなわち三項目自己批判要求をどうして学校当局は受け入れることができるのか、という点についてここで明確にすると、それはまず第一に、自己批判することによって決定的に教師としての「権威」が崩れるということ。そして第二にそれをしたところで決して我々の闘いは終らないということであり、第三に職業としての教師が首になるかもしれないからである。

第一の問題。すなわち教師としての「権威」は一体いかなる意味を持つのかということについて問題を明確にすれば、高校教育はそもそも「りっぱな人間を、全面的な人間を、いかなることにしても対応のできる人間を」といった形で提起されるが、本質的にはブルジョア社会の階級維持を唯一の目的に都合が良いか悪いのかという問題の設定で行なわれ、そこから自然に発生する矛盾や不合理をおおい隠し、生徒に幻想を与え「教育」するためには教師としての「権威」は絶対不可欠なのである。端的に言えば、教師と生徒の間は常に境がなければならぬのであり、自己批判することとは、それを埋め、教育の本質を明らかにするだけなのである。その幻想としての「権威」が崩れた時生徒は決起し、帝国主義の本質を知るのである。そして第二の問題として、おおい陰されたペールがはぎ取られることによって闘いは、更に非和解的な、非妥協的な永続的なものへと発展するのである。そして自己のブルジョア的私的問題で教師の座を守り、時によって機動隊導入をも貫徹する教師、学校当局

い時、それは反動的にさえなる。

確かに我々のバリケードは、最も日常生活に密着したもの、机やイスを積み上げて直接的にその思想性を表わすわけだが、それをしたことで闘いは決して終らないし、正にそれは本質的矛盾、帝国主義を打倒する岩として位置付けなくてはならないのである。

すべての問題は帝国主義にあり、それを打倒しないかぎりその問題の一切の解決はありえないのである。

そして自己否定の本質とはむしろそういう政治的階級闘争を主体的に展開する側の英雄的犠牲をまったく犠牲と思わないというところに完成された姿があるのである。

D われわれが最後まで追求した大衆団交とは一体何だったのか、それは学校当局に対して先に述べた三項目自己批判要求を全ての青高生の前で貫徹させるものなのである。学校当局の九月以来の対応と、二回にわたる機動隊導入といった犯罪性、その階級の本質を余すところなく明らかにし、弾劾するのである。これに対して学校当局の提起する討論会、全学集会等々は問題の本質的階級性を陰べいし学校当局の立場（階級の本質）を固定化し、いかに問題を解決するのかという物質的保障を否定するばかりかそれを解決不可能なものとして（教師としての立場がある。しかたがないから機動隊を導入する。そしてそれはその時点において耐えがたき処置であったが正しかった。）位置づけるものなのである。であるが故に問題の本質的解決を全ての生徒の前で追求するならば、当然当局の提起する欺満的集会は徹底的に粉砕されねばならない。そして圧倒的な大衆的支持のもとに全てのヘゲモニーを全学共闘会議が握りそのような全人民的な政治的力量をもって展開されるのであり、そこに於いては一

点の妥協も協調も問題の本質をそらすものとして、自己批判要求貫徹へ向かって突き進まなければならないのである。

Ⅱ 第二民青革マル反戦高連を粉砕せよ！

我々はここでハッキリと革マル派Ⅱ反戦高連に対して非妥協的な党派闘争を押し進めなければならない。

それは彼らの存在自体、その思想と「実践」自体まったく革命的左翼の闘いに利益をもたらさず犠牲と不幸のみを残すのであるからなのだ。

青高の初めから終りまで彼らは闘争に主体的にかかわらず、学校当局の欺瞞性、機動隊の直接的暴力的介入に対して決起せんとする大くの青高生に対して彼らの指し示したものは一体何だったのか。――残念ながら何もなかったのである。イヤ何もなかったと言うよりも何も指し示しえなかったのである。

青高闘争と彼らとの関係を省るならば、彼らの本質自体そして、それを構成する組織員自体、内容などまるっきりないし、人の言葉じりに取りつき四十女のヒステリックな叫びに似た空虚なたわ言を叫ぶ事しかできないということを変更して認識させてくれるのである。

10・21徹底抗戦を前にして彼らは彼らの本質、自己のブルジョアの価値感と理論的無知と日和見主義を革マル派の党的綱領の本質との一致から見出すといったその醜態な姿をさらけ出したのである。

彼らの主張は「徹底抗戦などしたところで何も克ちとれるものではないし、それこそ反戦高協のセクト主義的闘争の歪曲である。」といったズブズブの革マル派よりは、革マル派の反革命綱領の個人的認識の欠如といった点でいくぶん左翼的良識のみえるもの言い方を残してはいるが、決して放置しておくことはできない――い

ら青高の反戦高連の政治的信頼と軍事的理論的力量が極めて欠如しているとしても――のである。

それはまず第一に、青高闘争の本質と、克服すべく課題の徹底しな不認識にある。

第二章と第三章で述べてあるように青高闘争と10・21徹底抗戦の歴史的階級的必然性と意義が、彼らには全く理解できないのである。彼らが「徹底抗戦は反戦高協のセクト主義的、闘争の歪曲」であるというなら「反戦高協のセクト的、闘争の歪曲」であるところの反帝国主義、反スターリス主義世界革命を断固勝利させようではないか！

自己の日和見主義と全共闘指導部の理論的実践的水準の高さに対する感情的反発の以上でも以下でもない。彼らは我々にとって、一点センメツの対称でしかないことを明らかにしなければならぬのである。

10・21以後、獄中に多くの尊い活動家を奪われていた我々に対して、何の組織的弱体化も（全く当然であるが）、受けなかった彼らは、時を得たとばかりに「第一次青高闘争の破産を産みだした反戦高協を乗りこえ、全共闘を革命的に解体止揚し、教育学園闘争を展開せよ。」と第二学区の反戦高連を全てかり集め大々的に登場しようとしたのであった。

しかしながら言葉を借りていうならば、第一次青高闘争に於いてその全過程で全く闘争にかかわらず、そこにあった革命的資質を一切たりとも主体化しえず、非誇と中傷に明けくれていた彼らの発する言葉こそ場ちがいなものはない。

であるが故に彼らのイデオロギーはまったくの大衆性と革命性を

もちえず一向に「報われぬ」のである。

第二章 十・二一徹底抗戦の革命的意義

青高闘争のもつ革命的資質、階級的非和解性とわれわれの非妥協的たたかひの意義をはっきりと受けとめ70年代を突き進むうえで、われわれはここで10・21徹底抗戦の持つ本質的革命的意義を明確にしなければならない。

A) 全学共闘会議と日本帝国主義との血みどろのたたかひ

10・21徹底抗戦の第一の革命的意義は、日本高校生運動の新たな地平、すなわち従来の生徒会運動や合法的政治活動のわくを完全に突破し武装バリケードを断固として守り抜く思想性と革命的資質によって日本帝国主義者との血みどろの闘争の中から日本帝国主義打倒の階級的スローガンと、それを主体的に受けて起つべく全学共闘会議という組織を克ちとったところにある。それはまた全てのたたかう高校生に、問題の真の解決は、好むと好まざるとにかかわらず国家権力機動隊との暴力的対決そしてその軍事的勝利なしには絶対ありえないという事を指し示したのである。すなわち学校当局はわれわれのたたかひの誓、たたかひの根拠地としてあるバリケードを解除するために、或は治安当局独自の判断で機動隊を導入するのである。しかしながらそれは単純に「学内に暴力的学生が在り、バリケードを造った」という問題ではなく、そのバリケードがすなわちわれわれのたたかひが全社会的な階級的矛盾に源を発し、全人民の階級的資質、プロレタリアの資質、そして階級闘争と

有機的連関の中で必然的に日本帝国主義打倒の大きな階級闘争の流れに合流するがためなのである。

であるが故にわれわれが徹底抗戦といったたたかひを貫徹することによって、従来のたたかひのその合法的学内の性格や戦後民主主義の幻想の支配と空想的非暴力主義に屈服しつづけ、完全にそこを突破することができなかったものを、逆に明確に暴力主義を掲げ完膚なきまでにそういったわくを突破し、日本帝国主義打倒の階級闘争の本質を積極的攻撃的闘争の中に刻印しえたのである。

B) 日本帝国主義打倒の目的意識的追求

そして、10・21徹底抗戦の第二の革命的意義は第一の革命的意義を通すことによって、個別学園闘争の徹底化ということを経由して日本帝国主義打倒の目的意識的追求という事を指し示した事にある。われわれはこのたたかひによって、大学闘争に於ける第一次学園闘争の克服しえなかった課題「個別学園闘争のわく」をなんなく突破し、全国の高校生との連帯のもとに、日帝打倒への道の断固たる進撃を克ちとりつつあるのである。

そして反戦高連の曰く「教育学園闘争」、「自治権獲得」といった時代認識の根底的誤りとそして本質的思想の改良主義的闘争化の害毒に犯されることなく、彼らの第二民青として、革命派のあやまつた一党派ではなくすべての面での武装反革命としての本質をあばかなくてはならない。

また、学園に於ける「学校権力」に対する二重権力闘争うんぬんといった歪曲された闘いではなく、そのような学園が一個独立し社会から切り離されたところにあるたたかひとしてではなく、はっき

きりと日本帝国主義打倒のたたかいは日米安保同盟粉砕のたたかいは党的結集の中から導き出さなくてはいけないのである。

日本帝国主義打倒を、沖繩奪還・安保粉砕を語らずして青高闘争の本質は語りえないのである。

C) 青高を安保粉砕・日帝打倒の砦とせよ

そして第三に確認しうる徹底抗戦の革命的意義は、まさにわれわれのバリケードが単なる「象徴」ではなく物質的に闘いを保障する砦として位置づけられたことである。バリケードのもつ最も重要そして本来的意義はここにあるのである。

まさしく闘いの砦として機能し存在するバリケードこそ、最もプロレタリア的、革命的本質的存在と言えるのである。

武器を準備し、宿泊を保障し、会議の場所と秘密を守り、食事を供給し思想を養うといった事全てを円滑に行なえてこそ、より強い、そしてより不屈のバリケードとなるのである。青高の建て物そのものを、われわれが支配し、日本帝国主義打倒のたたかひの出撃の拠点として、砦として構築するたたかひを、10・21徹底抗戦はものみごと創出し、そして多くの高校生を決起せしめ、怒りに燃える魂が次々と都内数十校に及ぶバリケード闘争が爆発していくのであった。

われわれは今こそ、再びより不拔の砦として青高を位置づけ安保粉砕・日本帝国主義打倒の闘いの全国の高校の拠点とすることを本質的課題としてはっきりと確認しなければならぬ。

D) 闘いは多量の革命的プロレタリア戦士を育てあげた。

闘いは多量の革命的プロレタリア戦士を育てあげた。それは先に確認したように、たたかひが改良的闘争として、収束するのではなく、日本帝国主義打倒への目的意識的追求といった思想性と、仮に闘争が権力的弾圧と当局の欺瞞の対応によって敗北をこうむったとしても、それによっていわゆる一時的、あくまで一時的「平静」となったとしても多くの生徒大衆は本質的な問題の解決はそれによって絶対に与えられず、決して満足してはいないという主体的根拠と、第三章で述べてあるように客体的条件としての日本帝国主義の体制的危機を要因にしている。

Ⅱ) 70年代の高校生運動

最後に確認すべく徹底抗戦の革命的意義は、「70年代の高校生運動」の展望をはっきりと克ちとったところにある。

われわれが徹底的に権力との非和解的關係をこちら側から積極的・非妥協的対決へと導くことによって70年代の高校生戦線こそ、真に日本の階級闘争を主体的ににないうる部隊として登場しうる展望をかちとったのである。

それは先に確認したように、たたかひが改良的闘争として、収束するのではなく、日本帝国主義打倒への目的意識的追求といった思想性と、仮に闘争が権力的弾圧と当局の欺瞞の対応によって敗北をこうむったとしても、それによっていわゆる一時的、あくまで一時的「平静」となったとしても多くの生徒大衆は本質的な問題の解決はそれによって絶対に与えられず、決して満足してはいないという主体的根拠と、第三章で述べてあるように客体的条件としての日本帝国主義の体制的危機を要因にしている。

最も抑圧され分断支配されている高校生階層のたたかひこそ、すべての問題が一切解決されないままの帝国主義の本質へ鋭く突きささり、いかなる弾圧がおそいかかるうとも、それに真向から受けこたえ粉砕し断固としてたたかひを守り抜くといった主体的根拠に、さらなる帝国主義的教育をおしすすめ反動の極に達するといった客体的情勢に対して、高校生運動の圧倒的大衆的爆発こそ、安保粉砕・日本帝国主義打倒の闘いの大きな切り口を切り開くのである。そういう観点でさらに70年代の高校生運動というものについて

そして徹底抗戦の第四の革命的意義は、まさにそのようなたたかひを準備し貫徹していく中で革命的内乱の階級闘争を真に主体的に確信をもっていかなる弾圧をものりこえ断固として突き進みえる強固に武装された闘争主体を大量に克ちとったところにある。

今やわれわれとともに闘い、そしてわれわれの闘いにつづいてきた多くの先進の高校生は、続々と若きプロレタリア戦士として、革命家として誕生しつつある。

これこそまさに、なにごとにもがえがたいかくとくされた最も大きな宝である。

ブルジョアの価値観、人生観をさらりと捨てさり、プロレタリア的感性と倫理をかくとくし、革命のためならあらかぎりの力をふりしぼり命をかけて闘うことに真の解放への喜びを感じる素晴らしい多くの革命家が誕生しているのである。

レーニン「共産主義に於ける左翼小児病」に於いてポリシェヴィズムの規律―革命家の本質を次のように述べている。

「それは、第一に、プロレタリア前衛の意識、革命に対する献身、その忍耐、自己犠牲、英雄主義によってである。第二に、彼がきわめて広範な勤労者の大衆、まず第一にプロレタリアの勤労大衆と、だがまた非プロレタリアの勤労大衆ともむすびつき、彼らに接近し、必要であればある程度まで彼らとけあう能力によってである。第二に、これらの前衛がおこなう政治的指導のただしさによって、彼らの政治的戦略と戦術のただしさによってである。―ただし、これはもっとも広い大衆が自分の経験にもとづいて指導の正しさを認識するという条件のもとである。」と。

これこそまさにわれわれが獲得せんとし、またしつつある「革命

語るとすれば、客体的情勢の危機的深化に伴う教育の極的反動化の嵐の中で、いわゆる生徒会運動、全共闘運動等々の運動形態をとりながらも、本質的に全社会的政治的流動を主体的にに成り、すなわち日本の階級闘争を主体的に積極的展開しうるものとならなければならぬ。そのような前提のもとに、非合法活動(合法的活動のわくは徹底的にせばまれるのははっきりしている)である。を大衆的に組織化することを通じて、対権力との死闘を実践的に展開するのである。70年代の高校生運動は様々な帝国主義の矛盾を追求し、しかも圧倒的な大衆を「党的」に結集し、日本階級闘争の最も大きな支柱として成長しなればならぬのである。

青高闘争は、高校生こそ政治活動の先頭に起たなければならぬ事をさし示した。そこで、それを言わしめる客体的情勢というものを、青高闘争との有機的連関の中に明確にしなければならぬと思ふ。

第三章 内乱的死闘の七十年代へ 高校生は政治斗争の先頭に起て

戦後、二十四年にわたる日本の階級闘争は、11月決戦を10・8羽田闘争以来のあららしく鍛え抜かれ、養われていったわれわれの全組織的力量を傾注してたたかひ抜くことによって、新たな歴史的転換の時代、革命と反革命が激突する時代、「内乱的死闘の70年代」へと突入した。日本帝国主義が、ガラガラと音をたてて崩れゆく歴史の序幕を、われわれは今切っておとしたのである。ブルジ

ないということである。何度もくり返し述べているように、戦後のアメリカ帝国主義は、先進帝国主義の上に軍事的経済的に君臨するとともに、後進国の全面支配としての盟主の座を膨張に膨張を重ねる巨大な資本の蓄積によってかくとくしているのである。それ故、

そこそこにおこる矛盾というものは当然、アメリカ帝国主義の本質的問題として、根本的な点における混乱と破産の危機にあえがざるをえないのである。アメリカ帝国主義のアジア支配侵略政策の変更、敗退という問題はすぐさまその帝国主義としての存立基盤に反映されていくのである。そして、またそれをのりきるには狂気じみた、さらなる抑圧と侵略をくりかえし、どうにもならないところまでおいつめられていくのである。そして第二にはベトナムにおけるアメリカ帝国主義の敗退は、全世界の革命的プロレタリアートの総決起の狼煙で扱われることである。すなわち、ベトナムにおける敗退は、世界体制の基軸国の危機であり、世界経済全体に致命的なものと、国際帝国主義各国の政治経済に破局的状況を創りだし、体制的危機とともに、革命的危機の成熟が展開されるということである。であるが故に動揺を革命へ転化すべくプロレタリアートの決起号令なのである。個々の闘争を軽視し卓上の論理（マルクス主義から速く離れたブルジョア的認識）を振りかざす革マルなどは、この点において、ベトナムにおけるアメリカ帝国主義の敗退が、帝国主義世界体制の世界的なそして革命的危機であることが認識できず、そして米帝の敗退・列強対立、そして、戦争といった形しか頭に浮かばないのである。これは、今こそ決起せんとする革命的プロレタリアートを惑わせ、その武装をさまたげる反動的なものであるという点についてははっきりと確認する必要がある。ベトナムにおける民

いのである。

しかしながら、そのような本質的内容をもつ日米安保同盟に規定された、日本帝国主義の諸政策は、十一月決戦によって、その本質的結合を勝ちとった沖繩と三里塚における全軍労と反対同盟の闘いによって、全く破壊をきたしている。そのような中において、日米共同声明こそ、全く日帝自身の死刑の宣告に他ならないということがいえるだろう。海外への進出を延命の道と定めた日本帝国主義は、危機に危機を重ね、動乱一步前の朝鮮を、そして全く不安定な東南アジアへの、無展望な支配を行なわなければならないのである。

第二節 日本帝国主義と

日本イデオロギーの統一

A) 日本帝国主義と日米共同声明

周知のごとく、日米共同声明によって明らかにされたように、日本帝国主義はアジアへの軍事的経済的侵略を公然と準備し始めた。高度成長によってもたらされた生産力の肥大化を乗り越えんとするために、市場を求め、そして物的資源と労働力を海外から、なかならずく東南アジアから獲得するといった基本的かつ本質的方向性が、そこにあるのである。しかしながら、その日米共同声明の背骨をなすものは、帝国主義的秩序と支配を保つことのできなくなったアメリカ帝国主義の肩がわりの存在としてそのカサの下で、世界的危機の最も顕在化しているアジアへの支配、帝国主義的侵略を課せられているということである。

そして、日本帝国主義は、沖繩と三里塚を中心にくたやたらと帝国主義侵略体制の国内的確立の諸政策を展開せんとしている。沖

族解放戦線の闘いは、反帝国主義、反スターリン主義の立場をとらざるを得ない闘いとしてあり、唯一反帝・反スタ世界革命が解決への道なのである。

C) 安保同盟のもつ本質的性格

こうした中において、日米安保同盟はいかなる位置を占めるかという点、それは米帝のアジア支配の危機と日本帝国主義の政治的軍事的経済的脆弱性を補完し合い、決定的に暴力的支配と抑圧のために活用されるのである。すなわち、アメリカ帝国主義のアジア支配の破綻が帝国主義世界体制の根底的動揺を決定的なものとし、スターリン主義の支配をも本質的に崩壊へと導き出す中において、日本帝国主義の朝鮮をはじめ東南アジアへの経済的軍事的侵略において、日米安保同盟は絶対不可欠なものとしてあるのである。日本帝国主義にとつて、その基本路線は、国内の革命的勢力を崩壊せしめ、国家主義イデオロギーのもと膨張の極にある日本経済のその資本輸出に他ならない。そしてそれを政治的軍事的に保障し、貫徹せしめるのが日米安保同盟なのである。すなわちそれによって、アジア人民からの搾取と収奪の政治を行なり、強盗的条約としてある。そして戦後世界体制における奇型的なアメリカ帝国主義の支配を前提に、日帝の危機は米帝の、すなわち国際帝国主義の危機を導引し得るが故に、安保同盟は日米両帝国主義にとつて極めて大きな比重を占めた、日本帝国主義は、日米安保同盟の強化以外に延命の道はないという弱体性こそ、本質であるといえよう。日本帝国主義が帝国主義として活動し生きのびるには、日米安保同盟政策以外にはないのである。すなわち、日米安保同盟なくして日本帝国主義はあり得な

繩こそ、日本帝国主義にとつて（もちろんアメリカ帝国主義にとつても）その軍事基地は絶対不可欠であり、再編強化の対象である。そして、「沖繩返還」こそ一方において、「返還」の名を借りた国家主義ナショナリズムの構築を目的に、また「核ぬき・本土並みに」の欺瞞のペールの下に本土総基地化、沖繩基地の強化としての合理化といった準備を押し進めているのである。また、三里塚における空港建設阻止闘争こそ、空港一つ建設することの背景にある帝国主義者の意図は、「十九世紀の空港」といわれるように経済的軍事的侵略の直接的目的を一方に、政府ブルジョアジーの総合農政、農村の合理化、若年労働者の獲得といった側面をもつものなのである。そしてこうした日本帝国主義の国内の帝国侵略体制の全面的完成のために人民を抑圧し、政策は全て右傾化すると共に反動の嵐吹きまくる暗黒の社会がわれわれが闘かおうが闘かまいが顕在化することは容易にいえるのである。

B) 国内イデオロギーの排外主義的統一

●教育の極端な反動化●

日本帝国主義の国内侵略体制のもう一つの大きな環をなすものが、日本人民のイデオロギー的支配である。沖繩返還に名を借りた、あるいは朝鮮諸問題などによる国家主義排外主義イデオロギーの形成こそ日本帝国主義の意図するところである。二・一一建国記念日・紀元節復活、神話教育復活等々その政策は全く無原則的に解放された魚のごとく散乱している。そして高校生階層に対してその政策は最も露骨に展開されている。しかし、東大日大を頂点とした闘いは、大学の本質をすなわちその帝国主義国家体系の中においてそれ

ないということである。何度もくり返し述べられているように、戦後のアメリカ帝国主義は、先進帝国主義の上に軍事的経済的に君臨するとともに、後進国の全面支配としての盟主の座を膨張に膨張を重ねる巨大な資本の蓄積によってかくとくしているのである。それ故、

そこそこにおこる矛盾というものは当然、アメリカ帝国主義の本質的問題として、根本的な点における混乱と破産の危機にあえがざるをえないのである。アメリカ帝国主義のアジア支配侵略政策の変更に敗退という問題はすぐさまその帝国主義としての存立基盤に反映されていくのである。そして、またそれをのりきるには狂気じみた、さらなる抑圧と侵略をくりかえし、どうにもならないところまでおいつめられていくのである。そして第二にはベトナムにおけるアメリカ帝国主義の敗退は、全世界の革命的プロレタリアートの総決起の狼煙であるということである。すなわち、ベトナムにおける敗退は、世界体制の基軸国の危機であり、世界経済全体に致命的なものと、国際帝国主義各国の政治経済に破局的状況を創りだし、体制的危機とともに、革命的危機の成熟が展開されるということである。であるが故に動搖を革命へ転化すべくプロレタリアートの決起、号令なのである。個々の闘争を軽視し卓上の論理（マルクス主義から遠く離れたブルジョアの認識）を振りかざす革マルなどは、この点において、ベトナムにおけるアメリカ帝国主義の敗退が、帝国主義世界体制の世界的なそして革命的危機であることが認識できず、そして米帝の敗退・列強対立、そして、戦争といった形しか頭に浮かばないのである。これは、今こそ決起せんとする革命的プロレタリアートを感わせ、その武装をさまたげる反動的なものであるという点については、はっきりと確認する必要がある。ベトナムにおける民

いのである。

しかしながら、そのような本質的内容をもつ日米安保同盟に規定された、日本帝国主義の諸政策は、十一月決戦によって、その本質的結合を勝ちとった沖縄と三里塚における全軍勢と反対同盟の闘いによって、全く破綻をきたしている。そのような中において、日米共同声明こそ、全く日帝自身の死刑の宣告に他ならないということがいえるだろう。海外への進出を延命の道と定めた日本帝国主義は、危機に危機を重ね、動乱一歩前の朝鮮を、そして全く不安定な東南アジアへの、無展望な支配を行なわなければならないのである。

第二節 日本帝国主義と

日本イデオロギーの統一

A) 日本帝国主義と日米共同声明

周知のごとく、日米共同声明によって明らかにされたように、日本帝国主義はアジアへの軍事的経済的侵略を公然と準備し始めた。高度成長によってもたらされた生産力の肥大化を乗り越えんとするために、市場を求め、そして物的資源と労働力を海外から、なかならず東南アジアから獲得するといった基本的かつ本質的方向性が、そこにあるのである。しかしながら、その日米共同声明の背骨をなすものは、帝国主義的秩序と支配を保つことのできなくなったアメリカ帝国主義の肩がわりの存在としてそのカサの下で、世界的危機の最も顕在化しているアジアへの支配、帝国主義的侵略を課せられているということである。

そして、日本帝国主義は、沖縄と三里塚を中心にくたやたらと帝国主義侵略体制の国内的確立の諸政策を展開せんとしている。沖

族解放戦線の闘いは、反帝国主義、反スターリン主義の立場をとらざるを得ない闘いとしてあり、唯一反帝・反スター世界革命が解決への道なのである。

C) 安保同盟のもつ本質的性格

こうした中において、日米安保同盟はいかなる位置を占めるかという点、それは米帝のアジア支配の危機と日本帝国主義の政治的軍事的経済的脆弱性を補完し合い、決定的に暴力的支配と抑圧のために活用されるのである。すなわち、アメリカ帝国主義のアジア支配の破綻が帝国主義世界体制の根底的動搖を決定的なものとし、スターリン主義の支配をも本質的に崩壊へと導き出す中において、日本帝国主義の朝鮮をはじめ東南アジアへの経済的軍事的侵略において、日米安保同盟は絶対不可欠なものとしてあるのである。日本帝国主義にとって、その基本路線は、国内の革命的勢力を崩壊せしめ、国家主義イデオロギーのもと膨張の極にある日本経済のその資本輸出に他ならない。そしてそれを政治的軍事的に保障し、貫徹せしめるのが日米安保同盟なのである。すなわちそれによって、アジア人民からの搾取と収奪の政治を行なう、強盗的条約としてある。そして戦後世界体制における奇型的なアメリカ帝国主義の支配を前提に、日帝の危機は米帝の、すなわち国際帝国主義の危機を導引し得るが故に、安保同盟は日米両帝国主義にとって極めて大きな比重を占め、また、日本帝国主義は、日米安保同盟の強化以外に延命の道はないという弱体性こそ、本質であるといえよう。日本帝国主義が帝国主義として活動し生きのびるには、日米安保同盟政策以外にはないのである。すなわち、日米安保同盟なくして日本帝国主義はあり得な

繩こそ、日本帝国主義にとって（もちろんアメリカ帝国主義にとっても）その軍事基地は絶対不可欠であり、再編強化の対象である。そして、「沖縄返還」こそ一方において、「返還」の名を借りた国家主義ナショナリズムの構築を目的に、また「核ぬき・本土並みに」の欺瞞的ペールの下に本土総基地化、沖縄基地の強化としての合理化といった準備を押し進めているのである。また、三里塚における空港建設阻止闘争こそ、空港一つ建設することの背景にある帝国主義者の意図は、「十九世紀の空港」といわれるように経済的軍事的侵略の直接的目的を一方に、政府ブルジョアジーの総合農政、農村の合理化、若年労働者の獲得といった側面をもつものである。そしてこうした日本帝国主義の国内の帝国侵略体制の全面的完成のために人民を抑圧し、政策は全て右傾化すると共に反動の嵐吹きまくる暗黒の社会がわれわれが闘かおうが闘かまいが顕在化することとは容易にいえるのである。

B) 国内イデオロギーの排外主義的統一

≡教育の極端な反動化≡

日本帝国主義の国内侵略体制のもう一つの大きな環をなすものが、日本人民のイデオロギー的支配である。沖縄返還に名を借りた、あるいは朝鮮諸問題などによる国家主義排外主義イデオロギーの形成こそ日本帝国主義の意図するところである。二・一一建国記念日・紀元節復活、神話教育復活等々その政策は全く無原則的に解き放たれた魚のごとく散乱している。そして高校生階層に対してその政策は最も露骨に展開されている。しかし、東大日大を頂点とした闘いは、大学の本質をすなわちその帝国主義国家体系の中においてそれ

を維持し構成する人的資源の開発と階級分化のためにあるといったことを大衆的に明らかにし、そして破壊の思想は人民の武装と日本帝国主義打倒の闘いを教え、大学物事を完全に破壊させたのであったわけだが、そのような中において、帝国主義ブルジョアジーによって自由放題になされるままに支配されていた高校生は今秋の高校闘争によって、それからの解放の道を獲得したのである。

教育における帝国主義の排外主義イデオロギーの注入は、紀元節・入学式・卒業式等々の行事といった形で、かつ日常的な生活の中で、そしてまた教科そのものの中でそれを行なおうとしているのである。ところで昨年六月の文部省指導手引書以降の教育庁通達などの一環した方向性は、政治活動の禁止、受験体制への積極的肯定、闘う高校生などに対しては、徹底した処分、あるいは警察権力機動隊の導入―逮捕等への協力といったものである。必然的に現われる帝国主義の矛盾や不合理に対して全く素直に問題意識をもち追求し、そこにおける帝国主義の本質を認識することによって階級闘争に決起する者に対して学校当局は、処分や逮捕協力といった形で当人の実体的抹消をはかり、他の者に対しての慟喝をはかるのである。そして、そういった力による支配と屈服をもって、物を言わない人間を造り出し、行動しない人間を目指す人間を教育するのである。すなわち、そういったイデオロギーの支配のため、めくらめっぽうの方策を行じ、反動と暴力的支配の高校教育体制が構成されるのである。

第三節 高校生は政治斗争の

先頭に起て

問題の本質を認識し、露骨な帝国主義的階級の矛盾を追求し、闘

「出る釘は打たれる」式の弾圧ではなく、「根こそぎ」的なものとなっている。

であるが故に、反動を許すか許さないかという問いかけが、二者択一的にはっきりと提起される中で、われわれは積極的にそれを帝国主義を許すのか否かといったものへと、その本質を明らかにしなければならぬのである。

それは先に述べたように、帝国主義者の側から「帝国主義教育」として、積極的に政治的に押し進められるが、一方におけるわれわれこそその帝国主義の本質を明らかにする政治活動を、それを打倒する粉碎するといった闘い、すなわち革命的政治的斗争との統一の中に展開しなければならぬ。

階級的支配といった政治的本質をできる限り陰べいするといった帝国主義者の政治に対して、われわれは真向から攻撃的に、その本質をあばき、粉碎する闘いといった政治を貫徹しなければならぬ。すなわちわれわれは、処分粉碎、手引書粉碎を提起すると共に、はっきりと何のためらいもなく、沖繩奪還、安保粉碎日帝打倒の旗を高々と掲げなくてはならない。そして政治活動の禁止に対しては日本帝国主義を打倒するといった大きい視野からの断固たる政治斗争をもって応え、そして破壊の思想、武装の思想を大衆的に展開しなくてはならないのである。

そのような中で、わが青山高校全学共闘会議は、三里塚行動隊を組織し、一・一五―一八への三里塚、東大闘争へ断固として決起し、二・四沖繩全軍労支援闘争を貫徹する中で、二・一一紀元節粉碎闘争に八〇名の隊列をもって決起したのであった。また、わが青高全学共闘会議の組織的拡大は、定時制、教職員の中へと、そしてま

いに決起することは全く正しいし、むしろ最も抑圧され一方的に支配されつづけてきた高校生こそ、その先頭に起つて闘うことは当然の義務であり権利である。日本帝国主義のアジア進出への国内的確立、それによって引き起こされる反動の教育を断固としてくい止め、粉碎することはわれわれ高校生の階級の任務である。

青高闘争の指し示した闘いの方向性こそ、七〇年代の全ての政治的闘争を高校に持ち込み、多くの同志を、戦士を獲得するということである。そういった観点からわれわれはここではっきりと、「内乱的死闘の七〇年代へ向かって、高校生こそその政治活動の先頭に起たなくては行けない」ということを確認しなければならぬのである。

すでに明らかにしたように、八第三章第二節、特にB V 高校教育の極的反動化というものは日本帝国主義のアジア進出といった客体的要因と、高校教育の階級的矛盾の表出とそれに対するわれわれの血みどろの闘いといった要因によってますます激しさを増すことは明らかすぎるほど明らかである。ということはとって返していうならば、「反動」という日本帝国主義の階級的「政策」が徹底的に展開されるということである。活動家をねらい、徹底的に出される処分、表面的なカリキュラム等の変更で本質的問題を陰べいする欺瞞的改善案、積極的な権力への加担、逮捕協力あるいは当局の無対応そして一定の自由を認めそのわくで生徒を納得させる（決して納得するのではなく、矛盾が露骨には現われないので、しかたなしにするのである）といったことこそ、文部省、教育委員会等を媒介とする日本帝国主義者の階級的「政策」なのである。そしてそういった政策というものはわが青山高校において、われわれに対しては、

た全共闘の主力を形成していた三年各クラス闘争委員会の多くの学友も、あらゆる戦線で闘いを、非妥協的永続的階級闘争を展開することも圧倒的に確認されているのである。

より一層強固に打ちかためられ、拡大されつつあるわが全共闘こそ、まさに政治斗争の日本帝国主義打倒へのあらゆる闘いの先頭に起つてあろう。

沖繩奪還、安保粉碎、日帝打倒
全軍労スト連帯、三里塚決戦勝利
青高闘争勝利、全国高校闘争勝利
第二民青革マル||反戦高連セン滅
青高を安保粉碎、日帝打倒の誓に
高校生運動の大拠点に
全ての高校生は政治斗争の先頭に起て!

七〇年代高校生運動論へのアプローチ

反 戦 高 協 議 長 下 村 賢 太

第一章 戦後日帝の発展と公教育の

歴史的遷遷過程

第一節 一九四五年日帝の軍事的敗北

と戦後民主教育の始まり

第二節 日本経済の復興と教育政策

第三節 日帝の戦後体制の動揺と教育

第二章 七〇年代高校生運動の指針

第一節 高校戦線に於ける十一月決戦

第二節 内乱的死闘の七〇年代とは何か

― 日米共同声明に反撃のクサビを―

結語にかえて

徹底

全国反戦高協に結集する全ての学友諸君！

十・二一―十一・一六―一七に至るまでの一ヶ月間の軍事的死闘を貫徹した十一月決戦に、われわれは大勝利を納めたということであらためて確認しようではないか。なぜならば、今日われわれがよってたっている、この時点での階級関係が十一月決戦に勝利したという事実の上にあるからである。十一月決戦においては、高校生の手からも火エンピンが飛んだ。十・二一では、××駅に集結した反戦高協軍団二〇〇名は、「十月安保非常体制」を至る所で突破して運ばれた武器をもった。公然と武装したのである。そして軍団旗、スカイプルトの反戦高協旗を先頭に一気に新宿へ突入し、十・二一最後の激戦地、伊勢丹会館わきにおいて敵機動隊と断固たる闘いを展開したのである。確かに殲滅するまでにいたらなかったにせよ、はじめて組織的な武装闘争に決起した高校生にとって敵機動隊をけちらし、追撃するまで闘ったということは偉大な戦果であった。又一方においては、新宿制圧の軍事的戦略拠点である高田馬場を反戦派労働者軍団が攻撃し、その制圧に圧倒的に成功していた。有に五時間のにぼった高田馬場制圧戦で白ヘル反戦軍団は、一ヶ月間の軍事的死闘を勝ち抜くための偉大な教訓を、身をもって導き出したのである。それは、又文字通りの「肉弾戦の思想」である。白ヘル反戦軍団の労働者は、手に手に火エンピン角材をもって闘い抜いた。火エンピンが無くなると角材で闘い、それも折れれば最後は素手で襲いかかり遂に機動隊に体勢をとらせぬことなく早稲田大学までおいやったのである。又、他方、これら一切の闘いに活力を与えたものは、何よりも全国全共闘第二軍団の新宿構内突入といった快挙である。ガード上を突進する中核旗に勇気づけられた群集は、以後猛

然と機動隊と闘ったのである。

さてこうした中でわれわれはいくつかの教訓を得、増々意気軒高として十一月主決戦へと突き進んだ。そして蒲田一帯を火の海とかし、佐藤訪米への支配階級の期待とは裏はらな、人民の怒りの火柱人柱をうち立てたのである。

さて十一月決戦は、内乱的死闘の七〇年代を切り開くことによって勝利の核心を得た。内乱的死闘の七〇年代、それは何よりも日本帝国主義が内外にわたる戦後体制の矛盾の激化に規定されて、七〇年代の危機ののりきり政策として『日米共同声明』をうちだしたということに基軸がある。この『日米共同声明』が示す危機の時代に対応するための日本帝国主義の基本的内外政策とは、一体何を内容とし、何を意味しているか？ それはアジア侵略への日本帝国主義の積極的のり出しということに他ならない。そしてこのことは、アメリカ帝国主義を先頭に崩壊危機へと進む戦後帝国主義世界体制がアジア危機を焦点にいよいよ深まり、日帝がアメリカの傘の下で経済的肥大化の道を狂気の如く追求するという従来の行き方が最早許されないと示している。すなわち、基本的内外政策の反動的エスカレーションをもって日本帝国主義自らが、アジアの『泥沼』にとびこんでいったことを明示しているのである。しかも沖繩「返還」といったベテンをもってである。だがしかしこうした反動の嵐に、心ある民衆がだまっていようはずがない。今や七〇年代はわが革命的左翼とそれに領導された日本の心ある全ての民衆と日本帝国主義が全面的な対決に入らねばならない時代として開幕してしまっただけである。こうした時代こそまさに内乱的死闘の時代であり、この死闘に勝利するためには、われわれが掲げるところの「

アジア侵略の危機を内乱に転化せよ！」といった立場が要求されているのである。今我々はこうした中で荒々しい革命の息吹きを全身にうけている。これに真向うから答え、輝しい未来に向けて進撃するのかが今全ての高校生に等しく問われている。

想えば、六〇年安保闘争以来久しく日本階級闘争の檜の木舞台に登場することを抑圧されてきた高校生にとって、七〇年闘争はその主力部隊にならねばならないものである。われわれは、民衆の注目と期待を一身に受け、革命を自らのものとするために今こそ起ち上がらうではないか。そしてそれが可能な時代に生きている喜びもって確認しようではないか。

決起せんとする全ての高校生諸君！

革命をわれわれは生きている間に成功させるといふ志向性を持たねばならない。そのために、わが高校戦線に如何なる運動をつくり、それはどのような戦略的立場からなされねばならないのか、この点について若干の展開を試みてみよう。

まず、帝国主義的教育が完成されてくる過程での教育と日本帝国主義の密接な関係をみぬくことが必要である。五〇年代、六〇年代、七〇年代と時代の推移の内に展開された日本帝国主義の基本的内外政策の反動的エスカレーションと動向を共にする教育の遷移過程をみてとることが必要なのである。

更に、幕が切って落された内乱の死闘の七〇年代における基本的な階級関係の動向をみる中で、教育問題を媒介に高校生は何故政治闘争の先頭にたたねばならないかを展開していこう。

の日米安保同盟政策は、その根本的基底をまずは日本帝国主義の軍事的敗北にもったということである。

戦前、戦中を通して日本の統治形態は、周知のように地主＝小農制をその社会的支柱とした膨大な軍事機構をもって、独占ブルジョアジーの階級的利害を代行するといった特殊な形態＝天皇制ポナバルティズムと規定されるものであった。だがしかし、それが戦前の日本帝国主義を特徴づけた陰惨さわまりない圧制に示めされる如く、それが極めて危機的な構造であったことはいうまでもない。従ってそのことが、独占資本ブルジョアジーの支配勢力内に於ける政治的指導権の増大と、戦時国家の政策的諸条件（食糧制度、徴兵、破局的拡大、戦時経済（産業と言った方が正確。）への労働力の国家的、熱病的動員）によって一方では、小作料の無意味化、他方に於ける土地飢饉の解消を決定づけ、遂にはそれが天皇制支配機構の社会的支柱＝過小農制の基礎を破壊してしまうのである。おりしも、前線における日本帝国主義軍隊の軍事的敗北が、日とともに悪化していったのである。こうした日本帝国主義の大破局は、民衆の敗勢気分とも結合して天皇制イデオロギーの崩壊を増々つくりあげてしまったのである。

すなわちそのことは、一たび日本人民に前衛的政治指導が行なわれるや、革命的大反乱と結合することを意味していたのである。いわば、四三年のイタリヤ、一八年のドイツのような大破局、人民の反乱によってそもそも戦争政策の遂行すらおもうにまかせぬようになり、なによりもそれ以後の社会変革的動乱の危機が訪ずれることを意味しているのである。すなわち「帝国主義戦争を内乱へ！」である。こうした革命が文字通り現実のものとなってくる情勢を、断

第一章 戦後日帝の発展と 公教育の歴史的遷移過程

既に幾多の闘いを通して現実的にも、今日の日本高校生運動が「日帝打倒」の闘いと不可分であることは、先進的高校生諸君の前において多言を用いないことだろう。だがしかし、今だ多くの高校生大衆がこのような高校生運動の歴史的使命に気づくことなく、闘いの一定の混迷を招いていることは否めない事実であると言わねばならない。

ではこの様な高校生大衆の混迷に終止符を打ち我反戦高協の下、正しく領導していくためにはどうしたら良いのか。こたえは明白である。すなわち高校生運動の歴史的使命＝日本帝国主義打倒・安保粉砕の闘いへの高校生運動の合流は、戦後教育の歴史的遷移過程を一目すればわかる通り戦後日本帝国主義の発展に教育総体がその基礎を持っているのだとすれば、必然的であるといわねばならない。したがってわれわれは、このことをより一層深化させることによって高校生運動の階級的地位を獲得していかなねばならない。

第一節 一九四五年日帝の軍事的敗北と

戦後民主教育の始まり

戦後日本帝国主義の発展の基底をなすものは、何よりもまして太平洋戦争という形をとったアメリカ帝国主義との死闘に軍事的に敗北したということである。結論を先取りして言うならば、戦後日本帝国主義の再建を達成すべく彼等が選択した基本的世界政策として

固として回避せねばならぬといった日本帝国主義の階級的決意こそ戦後終結の主導権を「天皇」の名において掌握し、対日占領政策と「立憲君主制」へのなしくずしの移行を決意させたものなのである。一九四五年八月一日以後、こうした予防反革命的な政策は増々その色あいを濃くしたのである。あの戦後革命に対しては、既に無力化した日本支配階級を背後から支え、革命的な反乱を暴力的弾圧によって圧殺せんとしたのは、アメリカ帝国主義とその「解放軍」(?)であったのである。

だがしかし、敗戦帝国主義とも言うべき日本帝国主義は、日米同盟をたんに敗戦と占領に規定された消極的な政策として採用したのではない。このことに関しては、第二節で展開するとして、こうした予防反革命的な政策は戦後の最初の幕として開き、このいわば戦後処理第一段階に、対日占領政策を基礎に戦後民主主義教育なるものが設定されるのである。

第二節 日本経済の復興と教育政策

周知のように戦後革命期の闘いが、日共スターリン主義の誤った指導と労働者本隊に対する驚くべき圧倒的な大量首切りをもって大敗北に終る。労働者の工場占拠、地域住民の米よこせ闘争、メーデー等、戦後革命は、日共スターリン主義の根本的誤謬を基礎とした裏切りの指導の下で、それであっても日本革命運動の本来の姿を再現しつつあったのである。だがそれも相次ぐ政治反動の中でもろくも敗れ去るのである。

こうした中で朝鮮危機の招来とともに胎動しはじめたのは、日本

経済とりわけ重化学工業であった。そしてこれを機に、日本は経済的復興をアメリカ帝国主義の経済援助の下に開始するわけである。

この二つを決定的要因にして一九四九年、「職業教育振興方策」なるものが打ち出されてきたのである。これは戦後民主主義教育の根本的原則たる六・三制の中で単級教育といわれる総合教育に対して、職業教育の重要性を解くものとなり、今日のコース別教育過程の基礎をなすものである。いわばこの「職業教育振興方策」は、戦後教育の原則に矛盾するものとなった。しかし、焼土と化した荒廃する日本国内に日本の帝国主義的延命のために産業をよみがえらし、これに従事するよりよき人間を開発するということは、これくらいのことでは平気で行なうのが帝国主義者である。「職業教育振興方策」は言う。

「あらゆる国民は職業によって各自の生活を営むとともに、社会国家の要請に寄与していかなければならないから、職業教育の重要性は言をまたない……従って、職業教育に重点を置く単級校を多数設置する。」と。

こうした中で、朝鮮戦争（五〇年）は開始されるのである。政治的には戦後帝国主義支配体制構築の上で重要な環である、古典的アジア植民地支配体制の崩壊に対しての暴力的再構築として朝鮮戦争は開始されるのである。そしてこの「朝鮮動乱」は日本帝国主義に大きな影響を与えるのである。

朝鮮戦争の日本帝国主義に与えた影響の第一は、政治的軍事的問題として、戦後日本帝国主義の一貫した基本的世界政策であるところの日米共同の軍事体制⇨安保同盟の強固な建設をめざす上で、決定的な指示を与えることになったのである。

推進しつつここに大企業を頂点とするピラミッド型の大独占体がほぼ確立されるのである。こうしたことは、一定程度の景気の回復を見はしたものの五三年～五五年に至るまでの恐慌を巻き起す結果となったのである。この時期を第二の過程とすれば、この恐慌は、日本帝国主義の経済的再建の上で決定的意義をもつものになった。

すなわち鉱工業生産は決定的に没落し、戦時・戦後を通して温存されていた旧式設備の本格的な刷新がはじめて提起されたのである。こうして、雇用構造に於いても臨時工等の制度化と、既に一たん崩壊した年功序列型賃金と終身雇用制は、再び制度化されるに至るのである。

こうした一つの政治⇨軍事的な動向（五一年サ条約と安保の締結）と二つの経済的過程（第一次過程⇨五〇年～五二年、第二過程⇨五三年～五五年）を通して構成される五〇年代前半は、教育過程にも一つの画期点を形成させたのである。それは、日本帝国主義のこうした時期を通しての経済的再建に際して、高校教育の職業教育の重点化である。

こうした日本帝国主義の高校教育への要請は、「産業教育振興法」なるものをもって回答されたのである。それは一九五一年六月制定され、いわゆる職業教育振興方策として打ち出された職業教育と普通教育の分離に増々拍車をかけるものとなり、以後急速に職業高校の単級校化が全国的に推進されることとなったのである。このことは若年労働者の多量的獲得といった資本の要請にみごとくたえられているといわざるを得ない。

重複を恐れずあえて言えば、こうした日本帝国主義の動向に対して当初（五〇～五二年）民族解放民主革命といった誤った戦略的方

すなわち一九〇五年一月二日アチソン國務長官の声明は「日本の敗北と非軍事化は……我が国が日本を軍事的に防衛することを要請した。……この防衛線は、アリューシャン列島から日本を経て琉球へ至る。特にわれわれは、琉球諸島に重要な防衛拠点を有しており、それらを保持しつづけるであろう。」と日本防衛について述べている。こうして朝鮮戦争の戦前、戦中、戦後を通してアメリカ帝国主義は、アジアの帝国主義的支配体制の暴力的再現に向けて日本の特殊な価値を見出し、応急的な占領政策を乗り越え積極的な「何か」を求めたのである。その「何か」こそ、他ならぬ「サンフランシスコ対日平和条約」と「日米安保条約」を法制的基礎とする日米同盟であることはいうまでもない。このことを一方の軸として、他方においては、日本帝国主義はその帝国主義的再建の途につくのである。アメリカ帝国主義の対日政策が日本をアジアに於ける唯一の帝国主義国として再建するという方向に決定されたことに乗っとり、日本帝国主義は、五〇年七月八日付けのマッカーサー書簡をテコとして日本再軍備の動向を決定していくのである。それは警察予備隊（自衛隊の前身）七万五千の発足を同年八月一〇日に実現することによって急速に物質化されていくのである。

朝鮮戦争の日本帝国主義にもたらした影響の第二は、日本帝国主義の経済的再建の基礎の確立を劇的に促したということである。

このことは、過程的に考察すれば、二つの時期に分化する事ができる。その第一は、朝鮮戦争を通して行なわれた戦前型の旧設備を新鋭設備に転換することによって大合理化運動を行なった時期である。この第一次、第二次合理化運動（五一～五二年）は、何よりも大企業の経済界に於ける支配力を決定的にせしめ、企業系列化を

向ではあったにせよ、当時激発する国家権力と民衆の実力対決を積極的に評価する立場にいた日本共産党は、メーデー事件を除く火災ビン闘争を自己批判し、「極左」から「極右」へと大転換した。こうした日共の日帝への完全なる屈服を通して、実は五四年三月のMSA協定は確定されていたのである。かくして自衛力漸増についての合意の上にMSA協定を確定した日本帝国主義は、一方において太平洋に於ける多角的集団安保体制の主軸として日米同盟を積極的に打ち出し、他方ではあらゆる反動立法を制定し日米同盟政策を保障していく国内支配体制の反動化を推進していったのである。

こうした政治的状况を背景に、五五年を起点とする日本経済の高成長は、日本帝国主義の重工業化への道を達成するに至るのである。それは同時にアメリカ帝国主義の期待である日本再軍備の時に経済的基礎を保障するものとなった。そしてこの時期に「教育過程第一回改定」なる今日のコース別教育の確立をめざす動きがあったのである。それは、五六年に行なわれたのである。すなわち驚異的な高成長の真只中である。

「投資は投資を呼ぶ」という設備投資ブームによって重化学工業部門の強力な設備投資による、産業構造と貿易構造の高度化であったこの時期は、何よりも驚異的な高成長として特徴づけられていた。こうした中で五六年に於いて打ち出された「教育過程第一回改定」は、職業教育振興方策と産業教育振興法を基礎として、従来の選択教科制を廃止し、就職組、進学組、そして進学組の中で理数科⇨国立組、社、国、英科組⇨私立組といったコース別を編成するといった方向を採用しはじめたのである。つまり今日、高校教育の中で典型的な疎外形態であるコース別クラス編成の基本路線を確

定したのである。

疎外形態として結果している、この日本帝国主義とそのブルジョア政治委員会の教育政策は、それが何よりも大学進学を押し止どめしたがって逆に言えば、若年労働者として7割にも及ぶ高卒者を獲得していくといったところにその本質的意図を持っているというのとに明らかに規定されているからに他ならない。そしてそれは六三年、安保の改定をへて「教育過程第二改定」によって明確に固定されていくのである。

第三節 日帝の戦後体制の動揺と教育

さて日本帝国主義とそのブルジョア政治委員会としての岸政府は、教育労働者への勤評攻撃（五七年と五八年）警職法改正等、国内支配体制の反動化を推し進める一方、他方に於いては、安保改定にむかって日米交渉を本格的に開始し、推進していったのである。

すなわちそれは、朝鮮戦争の特需ブームをテコにして経済的再建の基礎を固めた日本帝国主義が、アメリカ帝国主義の戦後世界体制の盟主としての地位、アジア軍事支配と圧倒的な世界ドル支配を前提的条件としつつ、五五年以来の熱病的な重化学工業化をもって国内市場の膨張をはかり、さらには、このような経済的發展を基礎にして、日米同盟関係をいっそう積極的なものとしていくための、つまり、侵略と暗黒政治にむかっての内外態勢を準備するものとしてあったということである。こうした中で六〇年安保大改定に突き進むのである。

かくして民衆の激しい抵抗と批難の中で、強行された安保大改定

刃切り捨てた近近代化政策を推進したのである。だがしかしこうした日本経済の累積した矛盾—資本の過剰生産の迂回的な解決の過程は、独占資本の過当競争を構造化するとともに、都市問題の深刻化を生む中で増々体制的危機を深めていったのである。

安保大改定後の日本帝国主義の第二の攻撃をなしたのは、東南アジアにむかっての新植民地的膨張の積極的展開であった。

周知のように日本経済の戦後成長過程の終末は、過剰資本の整理と独自の原料市場の不可欠性を日本帝国主義に提起し、再度の海外膨張への衝動の決定的要因を形成したのである。六五年日韓条約を突破口とする南朝鮮への日帝の膨張は、戦後アジアとそれと相互規定の関係にある日帝の海外膨張への内的衝動の表現として把えねばならない。

だがそれすらも、問題の解決を促すものでも何でもなく、むしろその内にアジア情勢の危機的様相に日本帝国主義が直接、世界史的に規定される条件を形成してしまったのである。

こうして古典的植民地支配体制の崩壊に対する帝国主義アジア支配体制再構築の当初から、奇形的性格を持っていたことをはっきり認識しなければならぬ。

安保大改定後の日本帝国主義の第三の攻撃は、日本帝国主義独自の軍事力強化の政策である。すなわち、五〇年代的軍事力の要請—五〇—五二年の朝鮮戦争への在日米軍の投入によって、日本国内に於ける軍事的空白化が到来し、この異常事態への応急措置的な日本再軍備とはまったく質を異にして、六〇年代的軍事力強化の要請は、独占救済のテコとして自衛隊と軍需産業の生産強化要請の増大といふ内的衝動と、帝国主義アジア支配体制の永続的動揺による、日本

の政治的・経済的な特徴について触れるならば、旧条約の無制限な基地供与条約としての性格を継承しながらも、あらたに米軍と自衛隊との共同作戦を義務規定として付け加えることによって帝国主義国家間の侵略的強盗同盟の役割をいっそう明確なものにしたという点にあるといえよう。

そのことが露呈する事態は、最早明らかであった。それは帝国主義アジア支配体制の新たな動揺の中で、これを超軍事的暴力的にしかその解決方法を与えられないアメリカ帝国主義は、日本帝国主義に対して経済的に援助されることを強く要請し、そして何よりもそのために日本を同盟国として獲得するということが緊急の課題であった。これにのっとり自己の帝国主義的延命の途をみいだした日本帝国主義は、日米同盟に積極的に参加することを決意したのであった。この法制的表現こそ六〇年安保大改定であり、そのことは同時に、日本人に反動攻撃の到来として結果するのである。（このことは、六〇年代後半の闘いを全力をあげて闘ってきた我反戦高協にとってすれば身を持って体験してきたことであるだろう）

安保大改定以後の日本帝国主義の基本政策—攻撃の第一は、独占資本の高蓄積とその危機の打開のための財政政策の展開としてあった。

六二年を画期点とする高度成長過程の終末は、まず第一に五五年以来の熱病的蓄積がもたらした矛盾を深刻化するとともに、第二にこのような矛盾とその犠牲を弱小企業、零細商工業者、労働者への転嫁を促すものとなったのである。こうした背景に対して当時、岸にかわって池田が首相の座についてこれを積極的に推進したのである。すなわち、所得倍増の美名の下独占資本の救済—産業構造の底

帝国主義の海外権益の防衛といった外的衝動によるものであった。したがって多少の無理を暴力的に乗り切りながら、自衛隊の帝国主義軍隊としての本格的な強化を開始せざるをえなくなったのである。そして又、これがアメリカ帝国主義のアジア支配を補強するものとして、全土総基地化の暴力的承認として労働者人民の革命的反乱に対する鎮圧部隊として育成されているのである。三〇万に達しようとしている自衛隊が日夜そのためのみ訓練されているのである。自衛隊法による治安出動は、そのことをつまり帝国主義軍隊の最終的目的がなんであるかをはっきりしめしている。

安保改定後の日本帝国主義の第四の攻撃は、国内支配体制の反動的強化の攻撃である。間接侵略の理論は、国内治安秩序の維持のために軍隊・警察を主力とする全反革命暴力措置の動員を決定づけるイデオロギー的媒介項をなすものである。

さしあたってここでは行政権力のポナバルティズムへ移行過程における今日の段階を、実態的に見ていくことにする。

すなわち、議会の形式化として結果している議会制民主主義の崩壊と、それを基礎とした、行政機構の絶対的権限強化であり、司法制度の裁判所を先頭とする反動的再編であり、これの三位一体的な攻撃である。そして何よりも治安弾圧機構の著しい強化である。すなわち、自衛隊を軍事力の中枢にすえながらも、さしあたって警察力の強化を飛躍せしめていくということである。

以上日本帝国主義の六〇年代に於ける飛躍的發展を考察してきたわけだが、この六〇年代に於ける戦後教育は、国内治安維持の攻撃と歩調を合せ、帝国主義的教育政策の一定の定着をみせてきたことをわれわれはみておく必要があるのだ。（重複してしまいがこの困

難性は、日本帝国主義と戦後教育を歴史的過程にあきらかにする上で不可避であり、同志、読者諸君の明せきなる理解力を持って対処してほしい。

四九年「職業教育振興方策」という建議に基づいて、職業教育への問題意識の転換を開始し、これを物質過程へのぼらせんがために五一年六月に「産業教育振興法」を制定し、職業高校の全国的拡大に着手。更には、五六年「教育過程の第一回改定」を行なうことによって、撰択教科制を全面的暴力的に廃止することを通して「就職か進学か」といったコース制の確立の基礎をつくってきたのである。六〇年代に突入するや、周知のように六〇年七月池田内閣の登場と同時に開始された、日本帝国主義の基本政策Ⅱ攻撃と合いまって「人造り方策」なるものが打ち出され、人間能力の開発がさかんに叫ばれ六三年「教育過程第二回改定」を持って疎外されきった高校生を生んだ、あの〇×式テスト体制とその当然の現実的帰結である能力別・差別教育の高校教育が完成されてくるのである。そして日韓条約締結を一大転換点として「植民地問題を内包した侵略帝国主義」へと胎動を開始した日本帝国主義の前述した如き日本の再軍備の本確化の中で、帝国主義戦争へと国民を総動員する擬制的イデオロギーの確立が日本帝国主義の高校教育への要請の第一である。そしてその第二の日本帝国主義の高校教育への要請は、「急激なる技術革命の時代に即応した教育」の確立であった。この二つの要請に応じたものこそ期待される人間像を含む「後期中等教育の拡充・整備について」（六六年）であった。日本帝国主義の第一の要請に応じたものは言うまでもなく「期待される人間像」であった。憲法の「天皇は日本国民統合の象徴であつて、したがつて「象徴に敬愛

の念を持つこと」は当然であるとする「人間像」の中には、支配階級のむきだしの政治的意図がはつきりとみてとれるのではないかと。日本帝国主義の第二の要請は、「後期中等教育の拡充・整備について」の項に於いて、あからさまに込められている。これはむしろ六六年に至るまでの帝国主義的教育政策に対するイデオロギー的補強・整合性を与えるものとして打ち出され、ここに完全なる教育の帝国主義的再編の基礎を確立したのである。

こうした以上、戦後教育の遷延過程を歴史的に解明してきたわけだが、大きな分化のしかたにせよ高校教育が、それだけでも社会的帝国主義的要請に充ててきたことが充分理解できるのである。すなわち①戦後日本帝国主義の経済的發展段階、②帝国主義的政治支配体制の反動的転換、といった動向に見合ったかたちで戦後教育が帝国主義的に改変されてきたことがわかるであろう。すなわち高校教育が日本ブルジョア経済にとって必要とする労働力商品を獲得する労働市場となり体制的イデオロギーを注入することによって帝国主義に忠実な人間をつくるという一個二重のものとして位置しているというこの歴史的証明以外の何もものでもないのである。

第二章 七〇年代高校生運動の指針

いよいよ本章において、七〇年代高校生運動の大爆発にむけてその指針について触れねばならない。そのために第一章で展開した戦後日本帝国主義の発展と教育の問題について要旨を整理しておく。まず何よりも、五〇年代、六〇年代と、時代的推移の内に展開さ

又、この問題について唯一自らの立場を明らかにせんとしている者が我々反戦高協であるならば、全ての高校生が反戦高協に結集するべきであるという所に、70年代高校生運動の圧倒的高揚の鍵がある。

第三になすべきことは、高校戦線におけるある意味での後進性の突破のために、あるべき姿への過渡的領綱の獲得である。「高校生は政治闘争の先頭に起つて、」を我々の合言葉にしなければいけないということである。

第一節 高校戦線に於ける十一月決戦

A 十一月決戦は勝利した！

今日、内乱的死闘の七〇年代の第一次、七〇年に突入したわれわれは、増々緊迫化する内外情勢の下にあって重要な任務をおつてゐる。

それは何よりも十一月決戦が切り開いた洋々たる地平の上に立てて我々高校戦線に要請されているより大胆な、より大衆的な、尚かつより革命的な、より強烈な高校生運動に他ならない。そのためには、我々の急務の課題として六九年卒闘からの高校生運動の爆発の高揚局面に鋭くメスを入れ、とりわけ十一月決戦をめぐる全国高校闘争からその意義と限界、克服への方向性を明示しなくてはならない。

いふまでもなく十一月決戦の勝利の核心点は、まず第一に支配階級が企図したところのベテンの沖繩「返還」を主軸としたところのアジア侵略へ向けての安保体制のより強固な確立といった攻撃Ⅱ七〇年政策が、完膚なきまでに粉砕され大破綻をきしているという

れていった日本帝国主義の基本的内外政策についての確認である。すなわち五〇年代において消極的に展開された日帝の基本的内外政策Ⅱ日米同盟が、六〇年代一安保大改定を経てⅠにおいて積極的に展開された事実を示められるように、日帝の内外にわたる戦後体制の根底的動搖は深刻に激化していった。逆に言うならば、日米同盟を積極的に推進したということは、日帝の危機的状態を示めしている。したがって日帝のこうした危機に対応するものとして教育が再編されていったのである。これは、六〇年代後半の「後期中等教育の拡充・整備について」と「期待される人間像」で一応の完成をみ、帝国主義教育としての露骨な姿をのぞかせるのである。

さて十一月、『日米共同声明』をもって開幕した七〇年代、内乱的死闘の時代とは、このような完成を一応みた帝国主義教育に如何なるものとしてつり出されようとしているのだろうか。

この問題の現実的解明の第一は、11月決戦一輝しい内乱的死闘の時代を切り拓いたあの大闘争の渦中、又それへ至る過程での高校闘争の意図と限界について解明し、同時に反戦高協の果たした役割について確認することにある。八・三一掛西闘争を岐点に青高闘争へと我反戦高協の決死的闘いに、この全国高校闘争が領導されたことに、あらためて我々は注目しなくてはならない。

第二に、今日アジア侵略宣言Ⅱ日米共同声明の下に展開されたじめた攻撃（全軍労働大量首切り等）の性格とそれに対する我々の立場の確立であろう。いふまでもなく、日米共同声明の下、七二年沖繩「返還」へ向けて開始された日帝の攻撃が、屈折性をもったアジア侵略の道としてあることを我々ははっきりと認識しなければいけない。すなわち、屈折性の根拠である日帝の全面的危機の認識である。

ことである。

日本支配階級が日米安保同盟政策を自己の世界政策として確定した、自らのよってたつ世界的条件の根底的動揺の中であって、一層日米安保軍事同盟をより強化する方向に向わせることを主要な課題としつつ、ベテンの「沖繩返還」を持って全人民をけむりにまこうとして、一方では、六七年十・八以来「安保粉砕・日帝打倒」という革命的スローガンを掲げて大衆的武装闘争（いわゆる十・八転換）へと発展してきた我革命的左翼に対して強権的弾圧を加えることによつて懐疑させることを意図し、他方において、「沖繩返還」のベテンを「エビ」にして社共を中心とする体制内左翼を屈服させることを媒介に、アジア侵略、「綱」を釣りあげようとしたのである。これこそが日本支配階級の七〇年政策である。これらが粉砕されたことは最早明らかである。すなわちまず第一に、革命的左翼とその十一月決戦つまり十二年に及ぶ我々の苦闘の歴史と、全存在をかけて日本の全人民に公然と武装決起を訴えたわれわれに対して、「十月安保非常体制」||首都の機動隊による強権的制圧をもつて防衛的に対処した敵権力を、あらゆるところで粉砕し、それを通して十一月決戦を断固実現したということであり、その限りにおいても敵支配階級はわれわれを壊滅することはできなかったということである。

その第二は、革命的左翼の壊滅といった想定の上で体制内左翼の完全なる屈服をおして七〇年の平和的乗り切り、階級闘争の平和的「協調的」砕への押し込みといったことがまったく夢であったという現実の前で、第三にむしろ沖繩一本土プロレタリアート人民の前に「七二年沖繩返還」の、施政権は返っても基地と基地経済はか

わらずといった方向がまったくのベテンのことを増々暴露し、そうなることによつて日本階級闘争がより激化していくといったことに他ならない。

十一月決戦勝利の核心点その第二は、こうした闘いの最先頭に反戦青年委員会の青年労働者が位置していたからに他ならない。

青年労働者が独自の軍団を形成し武装決起したということは、何よりもまず第一に闘いが学生だけのものではないということを確認したということである。

すなわち「激闘の七ヶ月」以来の学生運動の質の高さを「学生」であるといったた一言で、その質を低次元に落したり、あるいは抹殺したそうされることを結果として許してしまつたということである。これは、学生運動に示された階級闘争の革命的資質を低次元に落し込めるばかりでなく、その反動として労働運動の姿を本来の姿から大きく歪曲し、その結果として「学生」であるから可能な街頭闘争は「学生」がそうすればよし、「われわれは」、生産点・組合で闘う、といった妙な組合運動主義が根をはることになったのである。

だがしかし、それは十・二一高田馬場―新宿に於ける肉弾戦を軸に十一月決戦総体に於いて展開された反戦青年委員会の闘いによつて「中核派の労働者みためにやれば勝てる」といった限らない自信を、圧倒的な労働者に与えるといった方向で粉砕されたのである。総評・民同の永きに渡る組合運動主義的労働運動の支配と決定的な訣別を、しかもそれを大衆的に浸透せしめていたのである。

青年労働者が武装決起したということの第二の意義は、階級闘争の普遍性を今あらためて獲得したということである。

自分で働き、自分で飯を食うごくあたりまえの人が、武装闘争に決起したということは、誰でも闘争することができるし、ましてや学生・高校生は尚のこと闘争に打ち込めるということである。加えて言えば、こうした労働者の中には妻子を持つ人も多くいると聞いている。がしかし、彼らの決意は強固であるし、階級闘争への自己犠牲、献身性を貫ら抜く彼らの姿勢には啓服せざるを得ない。もちろん啓服ばかりはしていられないのだが。

さて青年労働者が武装決起したことの第三の意義は、前述した二つの意義も包摂した意味において労働運動が革命運動において示すべき本来の姿を今獲得しつつかあるということである。

つまり労働力を売り渡し、圧倒的なブルジョアジーにとつての富を生産しながら、動物的生命の維持しか許されず、とどのつまるるところそれすらも許されないのが労働者階級である。そうしたことを覆いかくすが如くブルジョア階級は、彼らの特殊な利益を「国民総体」の一般的国家意識として貫徹する為に国家をあるかのように構築し、虚偽の共同性をふりまくのである。そうした国家の体的基礎は、まさに警察・軍隊であることは言うまでもない。したがって労働者階級の自己解放の闘いは、ブルジョア国家の法を規範としたこれらの暴力装置の暴力的粉砕とプロレタリア独裁国家の樹立といったことが不可欠の課題なのである。したがってこうした労働運動を中核に実現されたロシア革命は、現代革命の根本的原理を解明し自国帝国主義を打倒したのである。このロシア革命以降スターリン主義による一国社会主義論をイデオロギーの基礎とする二段階革命戦略、平和共存路線といったものによつて世界革命運動、したがってまた労働運動に変質され永きにわたって支配されてきた。だが今

日、青年労働者の武装決起によつて労働者は、ロシア革命を序幕とする世界革命への大道を、今日的に継承する部隊となつていくといえよう。

結論を言えば、青年労働者の武装決起をもつて本来の姿を獲得しつつかある労働運動は、革命運動への労働者の立場||プロレタリア自己解放のため実現されるべき闘いとはどういう闘いか、という問に対してレーニンが身をもつて示した現代革命の根本原理をわずかであるけれども再現したのである。かかる意味においてはじめて労働運動は、革命運動に本来の姿を登場せしめたといえるのである。

B 高校生軍団の登場と全国高校闘争

さてこうした十一月決戦の渦中に高校生運動が立ち上つた第一の成果は、何よりもまして高校生が軍団として政治闘争の先頭に決起したということである。

高校戦線における十一月決戦、それは十・二一青高バリエード死守戦をもつて開始され総過程において一四名もの不逮捕者を出しながらも最後まで闘い抜き、十・二一では新宿において激戦となつた伊勢丹会館わきでの闘いに散在しはじめた大衆を再度糾合しつつか、唯一の組織軍団として先頭に起つて機動隊を粉砕した。十一・一六―一七主決戦においては、下丸子から羽田への進撃を幾度となく繰り返し、遂に翌朝蒲田駅への進撃を勝ち取り、駅前の群衆を巻き込みつつか戒厳体制を引く機動隊に突撃し、最後の一人が逮捕されるまで闘い抜いたのである。こうした我反戦高協軍団の闘いに比べ諸党派の「闘い」はあまりにもみじめであった。その中でくる逆行

した意識からいえば、無内容を勝利を叫んでみたり、敗北したと総括しているのは当然であろう。十一月決戦の中でわずか十数名の「突撃隊」を出したにすぎないM.L.派、学生部隊の人数増しに参加した構改諸派、BUNDの諸君、どの党派をとってみても十一月決戦としての意義、更には「機動隊殲滅」というスローガンのもつ、軍事と政治の問題点、いわば軍事問題が高次元において発展するといったことに対して、まったくの無理解であったといわねばならない。反戦高協はこうした中で唯一軍団としてスカイブルーの旗の下、最後まで闘い抜きたのである。

十一月佐藤訪米阻止闘争へと向う階級的力関係は、警察力の限界にまで登りつめまさに革命と反革命の総力対決として闘い抜かれんとした。が、かかる段階においては、当然にも高校生運動の出発が如何に未熟であろうとも、非常にすぐれた組織的軍事的闘いが要求され、しかもそれなくしては大众的決起と我々の闘いととの結合が克ち取れないといっても過言ではなかった。したがって十、十一月決戦に参加せんとする高校生は、反戦高協軍団として登場しなければならなかったのであり、高校生の政治闘争のはじめの組織的決起からして、一気に全共闘。反戦と同じ質の武装政治闘争の質を獲得していったのである。そして高校生の政治闘争への参加が独自の軍団形成をもって登場したことを通して、全国の津々浦々で起っていった学園闘争に一層の活力を与え、高校バリケードを常態化し、安保粉砕・日帝打倒の七〇年闘争への高校生運動の大合流を克ちとる水路をつくり出したのである。ここにこそ十一月決戦で高校生運動が勝ちとった第二の意義がある。

それは、青高闘争の渦中にさわめて鮮明な形態をもって実現されちようにスローガンとして掲げられたものこそ他ならぬ「高校生指導手引書体制粉砕」であったからである。高校生指導手引書は、最大の政治的意図を覆いかくすさまざまな粉飾が行なわれた。例をあげるならば「男女関係について……云々」といった形で高校生生活に対する不当な規制・干渉を加えていくといった中に、闘争の大爆発へ向けて不可逆的な方向をたどらざるを得なくなったのである。あげくのはてに、青山、日比谷、学芸大付高に見られる大量処分と警察力の導入による闘争の暴力的圧殺に狂気の如く駆けずりまわることによって多くの高校生大衆の不满・不平をかうことになったのである。

このようなものが、十一月決戦をめぐる全国高校闘争であるならば、その特徴は次のいくつかの点に明確に分類することができる。それは①文部省通達及び手引書に対する反撃 ②処分撤回 ③高校生生活に対する不当な干渉と規制に対する闘い ④受験Ⅱテスト体制に対する闘いである。以上の四つの点に全国高校闘争の主要な要因があったのである。

加えて日米共同声明Ⅱアジア侵略言が出された今日、七〇年一月二日「中教審の大学改革試論」なるものが出され、あらためて完成をみた帝国主義教育が強化されたことについてはっきりと確認しておかなければならない。

既に第一章でみてきたように、高校教育はその出発点からして極めて帝国主義的に再編されることを通して、大学などの自治の自由、学問の自由といった幻想すら与えられずに支配者の下に直接指導されてきたのである。荒れ狂った大学闘争の教育界への波及は、この体制内にながちりくみこまれた高校によってやっとの思いで防止さ

ている。青高闘争は、社青同・解放派Ⅱ反帝高評の諸君のいう「教育闘争の独自の発展」でも、横改派Ⅱ安保高戦・全高闘連の諸君のいう「連続改良闘争の政治闘争との内的結合」でもなく、ましてや反革命Ⅱ第二民青革マル派Ⅱ反戦高連のいう「大衆闘争と革命運動の区別性」「大衆闘争は学園闘争Ⅱ個別改良闘争である。」などといったもので決してなく、まさに青高闘争は、五項目公開質問（詳細は本誌青高闘争総括論文参照）といった個別改良課題から根本的解決Ⅱ革命の立場への飛躍をみごとに実現した闘いなのである。

「安保粉砕・日帝打倒」の誓としての青高を死守した所の十・二一の徹底抗戦に明確に示めされているものこそ高校生運動の到達すべき管制高地である。

更には青高闘争を中心とするわれわれ反戦高協の意識的組織的闘いによって活力を得ることのできた全国高校闘争も極めて広範に、そして大胆に打ち抜かれ、いわば六九年を全体を通してみるならば、支配階級に息をもつかせぬ勢いで闘われたのである。とりわけ重視されねばならないことは、六九年春、卒業式闘争の大爆発をもって度々も抜かれた支配階級が、更なる高校生運動の大爆発を恐れこの体制内の收拾と警察的弾圧、処分攻撃に最大の願望をもって打ち出した「高校生指導手引書」（五月二三日）の攻撃である。これが十一月決戦以前に出されたことと照し合せるならば、支配階級の七〇年政策と教育に対するブルジョアの要請の貫徹の為の予防反革命としてあったことはあきらかである。がしかし、考えすぎた(?)支配階級は、これを打ち出すことによって闘争の不可逆的發展の過程へ逆に引きずりこまれてしまったのである。すなわち、高校バリケードの常態化を生み出した十一月決戦をめぐる全国高校闘争に、い

れてきはしたものの今日それが内側から崩壊してきているのである。したがって今日支配階級は高校教育に対して、こうした内側から破壊するものへの対策Ⅱ弾圧といった反動的対策を軸に、体制イデオロギーの注入と労働力商品の獲得といった一重二重の攻撃をかけてきているのである。

我々反戦高協と先進的高校生諸君は、この中に闘争の素材を無限に見出しうるであろう。

第二節 内乱的死闘の70年代とは何か

Ⅰ日米共同声明に反撃のクサビを

日米共同声明にもとづいて今日、日本帝国主義は沖縄全軍勢に対して大量首切り攻撃をかける一方、三里塚農民に対しては事業認定を許可し、先日強制測量を強行せんとした。

だがこうした諸攻撃が人民の巨大な反撃を生み出さざるを得ないことは言うまでもない。

基地撤去Ⅱ土地奪還Ⅱ沖縄奪還とする全軍勢反戦を中心に第一波、第二波ストライキを実現している。それは基地のゲートというゲートにビケ隊を配置しビケによる封鎖を貫徹することによって基地機能を両スト合せて一六八時間もマヒさせるといふ闘争史上かつてない大闘争として実現されたのである。又、十九、二〇日強制測量に乗り出した三千の機動隊と公団を相手に座り込みで闘った農民は、これをみごとに粉砕し三里塚闘争にまずは勝利をもたらした。七〇年代の開幕にふさわしいこの二大闘争の中でより鮮明に内乱的死闘の七〇年代をイメージさせている我々は、今一度内乱的死闘という

七〇年代への規定根拠をより一層深化しなければならぬ。

それはまず第一に、日本帝国主義の危機、とりわけ高度成長の行きづまりによる日帝の経済不安、そして又、十一月決戦に於ける日帝の敗北といった中で全面的な政治危機について断固としてその危機の性格を深く認識するということであり、第二にその反動的巻き返しをアジア侵略体制構築を基軸に強行せんとする日帝の諸政策「返還」のベテンの反人民性のより具体的な攻撃の暴露である。すなわちそれは、七〇年七二年の沖繩「返還」準備過程に於ける「返還のために」とかいった諸攻撃に対して、更に沖繩奪還の旗をわれわれに掲げさせるであろうからである。結論から言えば、七〇年七二年の全政治過程において我々は沖繩奪還を再度、立場として確立せねばならない。

A 日本帝国主義の危機の深化

まず第一に我々のはっきりと確認すべきことは、日帝の戦後発展の行きづまり、諸矛盾の激化そしてその最大の問題である高度成長政策の内外両面からの動揺ということについてであろう。すなわちアメリカの戦後一貫したゆるやかな成長という戦後世界経済の発展の基軸となった条件が、「ゆるやか」であったが故にドル危機を生み、更にはインフレの悪質化とその「克服」によって動揺してきているということである。いまひとつの発展軸であるEEOもまたドイツ経済の成長力低下にみられる大きな壁にぶちあたってゆらいている。こうした諸条件(外的条件)の動揺と相まって、技術革新の

歴史的な不均衡や安価な労働力の豊富な存在などといういわば、内的条件も次第に失われつつあることは明白である。又開始された世界的インフレーションの波は、こうした日帝自身をまき込み犯しつつあることもまた見逃すことのできぬ点である。

更には、こうした日帝の高度成長の先行き不安が、単に経済的領域にとどまる問題としてだけでなく、日帝の世界政策といった諸方策を決定していくうえでの政治的支柱となっていたものである以上、又強いては、「平和的安定期の到来」だとか「国民生活の安定」だとかいった資本主義体制を擁護するイデオロギー的意義さえ有していた以上、圧倒的な影響をこれに及ぼすことは明白であるだろう。かくして今日では、その矛盾の激化の中で人民大衆の生活は犠牲にさらされるわけである。具体的に言うならば、(イ)経済政策については、基本的に経済成長促進型を取るのである(七〇年大型予算を見よ)し、それによるインフレは放置、容認されるのである。(ロ)高度成長維持上最大の問題点「労働力不足」は、農村の解体を通して労働人口の都市への集中を計るであろうことは、三里塚闘争の側面に於いて示されている。又自民党政府の「総合農政」に明示されている農地の減少は、更に拍車がかげられるであろう。(ハ)都市問題として結果する公害、交通、住宅問題といった矛盾の蓄積は、ますます放置され無政府の状態が継続されるだけである。

次に第二点として確認すべき事は、日帝自身のかかえる高度成長による諸矛盾、危機の問題である。とりわけ対外経済膨張政策の問題である。戦後の高度成長期とりわけその後半過程にあっては、対先進国の面に於いて①経済のインフレ的成長、②日本の技術革新とそれに基づく③輸出競争力の抜本的強化④「労働力」問題は、総体

として欧米より有利な条件をもち⑤従ってインフレ傾向は世界的にみれば低く物価面で対外競争力を強化した。その結果、先進国(特に米国内市场)にかなりの程度シェアの確保に成功してきた。(日米間矛盾の激化)

対後進国・半植民地の面に於いては、過剰商品の輸出に成功はしたが、過剰資本の輸出については、現地におけるカライイ政権の政治的安定度と経済的基盤が弱いことから日本が制圧しきることではきていない。

さてこうした中で、エコノミック・アニマルのようにふくれあがった日帝の生産力水準の下で、高度成長の更なる発展を確保するためには、ひとつに先進国への進出を強化することである。がしかし、このことは、いわゆる日米間矛盾の激化を生み、その突破を日帝の帝国主義としての「責任」を更に強化させる方向へと不可避的に進展せんとしている。いまひとつ物的、人的資源の対米依存一辺倒といった姿勢から日帝独自の資源開発への移行である。

B 日米共同声明IIアジア侵略体制構築

このような高度成長の諸矛盾の激化が人民の生活を耐えがたいものとしている時、人民の現状への不満が蓄積されている中で、高度成長自体の先行きに問題が生じているということは、階級矛盾の激化を不可避なものとするとも経済成長一本ヤリの日帝の立国的基礎をゆすぶり、政治的、イデオロギー的動揺をまきおこすものである。更には十一月決戦をもって七〇七二年の政治過程に安保、沖繩問題をめぐって巨大な人民の反撃が約束されてしまった以上、

いままでどおりの国家統治ではいつまでもやっていくことはできない。

また日帝の経済膨張の面において、既に日米間矛盾を媒介とした問題については述べたが、東南アジアを中心とする後進国、半植民地への帝国主義的進出のためには、米帝のベトナム・アジアにおける敗北を放置することは出来ないし、いわゆる現地政権の安定を確保しなければ資本輸出の抜本的展開はありえないのである。すなわち、結論をいえば、日帝は帝国主義としての政治体制、軍事体制の脆弱性からの「脱却」という歴史的な問題に達しているのである。この「脱却」たるや日帝の直面している危機に對比していくものとしてある以上、アメリカ体制として戦後体制の動揺とアジアの支配体制の未曾有の危機に対しては、日米共同声明によって示されたようなアジア侵略のための日本の安保II防衛政策のエスカレートとして対応しようとしているのである。ここにこそ諸党派の言う「日米共同声明によって日帝は70年政策を確定した」などといったことは、まったく無縁な日帝のアジア侵略の危機の切迫した表現としての日米共同声明の決定的意義があるのである。

まさに日帝のアジア侵略の危機を内乱に転化せよ、といった我々の闘いの方向を実現していく過程に登りつめたといえる。

C 沖繩「返還」のベテンの反人民性

既にみたように切迫した問題としてのアジア侵略体制構築へ向け、アジア侵略の直接の基地である沖繩を「日本」に「包摂」することによって安保の決定的エスカレートの突破口を切り開いたもの

こそ、日米共同声明と沖縄「返還」であり、ますますそのベテシ性、反人民性を露呈してきているのである。

そもそも日米両帝国主義にとって沖縄の基地としての重要性にふまえた、この沖縄に対する根本原理とは何だったのか。この点をまず解明する必要があるだろう。既に第一章、及び第二章第二節Bに於いて若干展開したように東南アジアに対する日帝の侵略野望は、増々切迫した問題となっていることは言うまでもないことである。その現実的な表現は何よりも沖縄の軍事的分離支配による基地としての沖縄の機能維持であった。これに日米両帝国主義は一切を賭けていた。ここに日米両帝国主義の沖縄に対する根本原理があるのである。

さてこの「基地沖縄の重要性」については何ら変更されず、つまり沖縄の現状の改革ではなく、むしろ逆に基地沖縄が機能維持・強化をされようとしているところに、そもそもその沖縄「返還」のベテシの反人民性の本質があるのである。しかもその再編・強化の方向たるや、あらゆる角度からの沖縄と本土プロレタリアートへの全面的な攻撃である。七〇年と七二年の政治過程において、七二年までは米帝が主権者である（逆に言えば、日本帝国主義はそれまで主権者ではない）という理由をもって、「返還」という美名の下に解雇を頂点とする人民の生活破壊から沖縄「防衛」のためと称して自衛隊の沖縄派兵と軍隊としての自衛隊の国民的承認の強要というイデオロギー攻撃に至るまで、したいほうだいの攻撃が、しかもそれが「返還のため」とかいったかたちでかけられてきている。

従ってわれわれは、土地奪還と基地撤去、永久核基地化粉碎、本土復帰を統一的に実現することを内容とする沖縄奪還を、この七〇

と七二年沖縄「返還」準備過程に鋭く提起し、更なる対決を推進しなければならぬ。

結語にかえて

以上本論文で展開してきたことに大胆にふまえ、高校生運動の革命的構築をめざして今われわれは、改めて高校生運動の現状に鋭くメスを入れていかねばならぬ。

今一度、十一月決戦とそれに至るまでの全国高校闘争の特徴をみるならば、第一に文部省の政治活動禁止の通達や手引書への闘いであり、第二に服装などにみられる高校生活への不当な干渉や規制に対する闘いであり、第三に処分撤回の闘いであり、第四に人間性の喪失された受験テスト体制に対する怒りの闘いであった。こうした高校生を即時的な闘いへの決起は、当然にも日本帝国主義打倒の闘いに大合流されない限り、根本的な解決は与えられないものではないのである。まさに政治活動禁止に対しては、より積極的な政治活動の展開をもって答える以外にはないのである。

想えば、六〇年安保闘争以来久しく日本階級闘争の檜ノ木舞台に起つことができなかった日本の高校生にとって、確に歴史を担いきることは困難かもしれない。だがわれわれは、泣きごとを言う前に、歴史を担い切るため日本高校生運動を命がけて飛躍させようではないか。「七〇年闘争の主役は高校生だ」という全日本の民衆の期待に答えようではないか！

安保粉碎・日帝打倒・沖縄奪還の大旗を掲げ、日帝のアジア侵略の危機を内乱に転化するために、今こそ全ての高校生は政治闘争の先頭に起て！ 断乎として起て！ 共に闘わん！（了）

反戦高協第一回全国大会

基調報告全文（一九六九年七月）

○ 七月全国大会の歴史的意義と獲得すべき課題

○ 危機に立つ日本帝国主義と六九年日本高校生運動の総括

○ 十一月決戦を突破口とする「激動期」に向けての反戦高協の任務方針

はじめに 七月全国大会の歴史的意義と 獲得すべき課題

本七月全国大会に結集した全国の反戦高協の同志諸君！
全ての先進的高校生諸君！

およそ日本階級闘争と日本高校生運動の歴史の中で真に記入されるべき資格をもつ反戦高協全国大会を我々は、今まさに開始せんとしているのである。

反戦高協の全組織の生命を賭して飛躍せんとするこの歴史的大会の冒頭に、我々はまずもって大会の歴史的階級の意義を確認し、会場を埋めつくした全ての学友に獲得すべき課題について、余すことなく明らかにしたいと考える。

七月大会をめぐる新たな情勢の特徴の第一は、米帝のベトナム支配が軍事的・政治的に破綻し、加えてベトナム情勢の決定的転換が明らかになりつつあるという厳然たる事実である。

ニクソン八項目提案↓ミッドウエー会談における米軍撤退の発表↓南ベトナム臨時革命政府樹立宣言とうち続く事態は、二年前の米軍・政府軍十万を投入して展開された大規模な敗北をもって幕をとして以来、軍事的敗勢の一途をたどっていた。もはや、五十五万在ベトナム米軍の中のわずか二万五千人撤退発表とはいえず、それが米軍の誇る精鋭部隊「第九歩兵師団」と、「第三海兵師団」だとわかると、残された兵士に不信と不安の増大を一挙的に拡大している。まして、撤退発表後、第九歩兵師団の兵士の配置転換（他の部隊へ

的環としてゐるのだ。

佐藤内閣の相も変わらぬ虚言の数々、「両二、三年以内に……」「六月B52の撤去の感觸……」etc.を尻目に、六月全軍労ストに対する銃剣制圧の現実こそ、その象徴であり、百万民衆の闘いに對するあらゆる弾圧が証左であるのだ。

七月大会をめぐる情勢の第三の特徴は、ベトナム人民による英雄的武装闘争がアジアの帝国主義支配体制に大きな裂目を形成しつつあるという点を端的契機として、アジアにおける全人民の反帝国主義闘争を再燃させているということにある。

戒嚴令の非合法弾圧下で（驚くべき事に、韓国においては、大学の中での集会すら禁止されている。）朴政権打倒の闘いを再燃させている韓国の学生・沖繩の百万民衆の銃剣をも恐れぬ非妥協的闘争、日本の労働者・学生・高校生・市民の闘いのどれ一つをとってみても、ベトナム人民の血と汗の結晶として実を成熟させつつあるのだ。総体の激動を同一基盤にすえた、にもかかわらずこれら個々の闘いは、断固たる革命派によって牽引されて、今や一齋に全面攻勢のスタート・ラインに上ったという意味において、決定的な意義を有している。

以上の諸点を明確に把握した我々は、この客体的条件の成熟がいかに成し遂げられねばならないか、七〇年と七〇年代階級闘争を準備するにあたって極めて鮮明に浮かび上がってきたものとして七月反戦高協全国大会において我々が獲得すべき課題が全面的に現われたらう。

今まさに開始せんとする七月全国大会において我々の獲得すべき課題は、まさに、まさに全面的である。

の）が判明し、持って行きどころのなかつた憤満を一挙に爆発させ、「混乱が起った」と外伝が報じるまでになつてゐる。このように「最後の戦死者になりたくない」という卒直な兵士の感情が、長年にわたる敗北と重なる爆発しなわけはない。事実、在ベトナム米軍の一割が戦線逃亡・ドイツ革命の突破口となつたキール軍港の兵士の叛乱のごとく、命令拒否が前者の数倍にも及び、軍隊内反戦活動の一挙の拡大をもたらしている。ベトナムにおける軍事的に政治的敗北がそれ自体政治的危機へと発展する歴史的資格を有するに、まして米帝の生命線たる帝国主義軍隊の内部からの反乱の烽火は、自国への政治的危機へと転化せざるを得ない。更に、ロジャーズ國務長官の現南ベトナム政府「ニュー・キ・フォン政権に対する「現政権に固執しない」という発言に至っては、止まる所を知らない帝国主義アジア支配体制の根底的動揺と、そのアジア危機の成熟は、韓国における朴政権を揺がす闘いの激発を頂点に、増々加速度を増して進行しているのである。我々は、このベトナムにおける米帝の軍事的敗北が、それ自体自己完結しない事を歴史の厳しい判決を待つまでもなく知っている。ベトナム侵略戦争というそれ自体をとってみれば、局地的な闘いにおける敗北が、歴史的な帝国主義の総体的危機を成熟させるという特殊な、にもかかわらず厳然たる事実を直視する中で、「戦後世界体制の根底的動揺」が決定的な段階にはいつた事をはっきりと確認することができる。

七月大会をめぐる新たな情勢の特徴の第二は、かかる帝国主義アジア支配体制の危機的様態が、米帝の全面撤退→全面和平と進展するのでは決してなく、むしろ逆に反動的收拾策として日米安保同盟の反動的再編強化への道として、沖繩の「永久核基地化」を中心このことに踏まえて獲得すべき課題の第一は、我々がこれから迎えんとする「歴史的激動期」ということの真価を、「人間解放と大立脚点」から全面的に把みとることであり、その第二は、この「歴史的激動期」を切り拓く高校生運動の資質は何か、を把み出すものでなければならぬ。すなわち、革命と反革命の激突する時代、いかなる迫害をも乗り越え、断固として「革命派」を名のるといふことは、一体いかなる思想性、革命理論、革命的感性によってうち固められる必要があるのか、という問題であり、その第三は、その実践的試練たる十一月決戦を頂点とする現代日本革命の根本的方向、沖繩奪環闘争を打ち勝ちつつ貫徹するのといった具体的課題と方針を自分のものとして打ち固めることである。

全国の反戦高協の同志諸君！

先進的高校生諸君！

我々は、我々の追認行為としての歴史選択において帰るところのない、ただ究極的勝利に向かつての進路を驀進している。三か月の極度の傾斜を一気に登りつめ征服する以外に自己の生命力は躍動しない。我々は自己の主体的力量の一切を傾注して切り拓いた四・二八沖繩奪環闘争の安保粉砕・日帝打倒の闘いによって帰るところのない道へと自らすすんで突入し、今また、新たな力強い進撃を開始せんとしている。

同志よ！

立ち止まれ、そして数倍力強く前進せよ！

危機に立つ日本帝国主義と

六九年日本高校生運動その総括

Ⅰ 序章 Ⅴ

アメリカ帝国主義の圧制的庇護のもと、帝国主義的發展を続けてきた日本帝国主義は、今日その歴史の上で最も大きい深刻な局面に立っているといえよう。それはまた同時に、戦後日本階級闘争の上においても画期点を形成しつつあるのである。

まさにそれは日本の歴史に最も欠如していた革命的激動への序曲としての全国大学闘争の激発である。特殊部分的、先行的にそのことを表現した日大闘争の革命的資質は、全戦線にわたる主体の成熟にわたる最後の根拠地としてその地位を獲得しており、また日帝の戦後体制を一方の軸において揺さぶることをもって容体の成熟をも助長させているのである。

総体としてこうした革命的資質を獲得しえている全国大学闘争は、安保粉砕・日帝打倒の戦略的環を明示することをもって日本階級闘争を先端において切り拓き、もって闘いの血の道標としての確固たる位置を、いかえれば、一切の闘いの主客にわたる両軸を担って、闘いの根幹にすわっているということである。

そして、これを根幹にすえた上でわが戦線の卒闘は始めてその真価を發揮することができるのである。

全国大学闘争の一年余りにわたる闘いは革命的序曲を鳴らすとともに、その歴史的到達点、かの四・二八闘争をも生み落としたのである。

第一節 東大・日大を頂点とする第二次学園闘争の特質

(1) 早大・明治大第一次学園闘争の特質

資本主義の平和的發展の中にあつて唯一突出し、闘いの先頭に起つた早大闘争の、あの大量講堂前一人(早大総学生数三万人)集会の圧倒的大衆を吸引した闘いは、一五〇日間のストの成果も空しく「このままでは廃校だ」という学校当局の恫喝の前に全面的敗北を期して収束してしまつた。また、ブンドのボス交路線に対する大衆的糾弾の雨を降らせつつも、しょせん戦略なき戦術主義を追求する一部の諸君のために、全学連の革命的介入も遂に及ばず敗北した明大闘争。この二大学の巨大な闘争は、にもかかわらず、その現実的表現は違えども、敗北した最深の根拠が本質的には革命と改良との大混乱にあつたということ、今一度明確化する必要がある。

敗戦帝国主義としての戦後日本帝国主義が他国帝国主義と比較して、比較にならぬほど政治的に脆弱であることは、今や明白である。日本人民を擬制的に統一する反動イデオロギーすら保持してはいないのが日本帝国主義である。ましてや徴兵制から軍隊に至る存在は、ツメの垢ほどもありはしない。戦後体制の深まりゆく世界危機が不可避的に日帝に要求する侵略は、現実の日帝の世界史的特質によつて、実現の困難さを露呈している。しかし、米帝のベトナムにおける軍事的政治的敗北、ドル、ポンドそしてフランスの危機は、戦後帝国主義、また体制の世界史的危機を加速度的に推し進め、従つて日帝の上にも深刻な影を落とさずにはおかない。今日、日帝は日米安保同盟の反動的再編、強化を沖繩を結節点に世界史的要請に応

この一連の運動過程の主客にわたる發展を十一月決戦へ向けてのあらゆる意味での思想的・理論的武装のための教訓としてくみ尽くし、もつて本報告の歴史的意義に替えたい。従つて本報告は、まず第一章における革命への序曲ともいふべき全国大学闘争の、その総括を我々の今日に至るまでの過程におけるその根幹をなしているということに踏まえ、第二章、第三章は、文字通りその上に立つこと以外に実現でき得なかつた闘いの総括であり、この三つの章が極めて媒介的に総括されているということを念頭にに入れて欲しいと考えます。

第一章 歴史の牽引車—全国大学斗争の爆発

第二次学園闘争の爆発の高揚は、遼原の火の如く全国津々浦々、燃して燃し尽くしている。第二次学園闘争、東大一月一八、一九日を頂点とする闘いは、高校生戦線のみならず、あらゆる階級(現実には、藤原世話人を先頭とする反戦青年委員会に結集する労働者階級)、階層に日本階級闘争にかつてない感動と打撃をもつて受けとめられた。高校戦線にあっては「帝大解体」をもつて明示された大学闘争のその質が、かの全国を揺り動かした卒業式闘争の基底の一構成要素として存在したことを、今再び確認できるであろう。本報告では更にその深部に鋭くメスを入れ、卒業式闘争の意義を明示する上で土壌を構築せんとするものである。

えるために、全土侵略基地化、政治的臨戦体制化に向けて、集中的な攻撃をかけてきている。そして重要なことは、これらの攻撃が、大学もその攻撃の結節点にしているということである。

戦後一貫して大学問題は日帝の攻撃の貫徹していない残存の分野として実に多種多様の根深い諸矛盾をかかえていた。だが、日韓条約を転機に大学・教育の帝国主義的再編は本格的につき進まんとした。日韓条約に基く日帝の植民地帝国主義への転換は、海外侵略にのり出すとともに、国内支配体制の反動的確立のための攻撃を画期したのである。「外への侵略は、内への反動を促す」のである。戦後の支配体制の反動的総決算をかけて、あらゆる方向、とりわけ教育への全面的攻撃を開始したのである。かくして、大学・教育に対する法的改悪による法制的攻撃、大学内に対する日常化した機動隊の導入、乱入と、その攻撃は激化したのである。

しかし敗北したものの今も引き続き闘っている高経大の闘い、横浜大、早大と大学闘争の大衆の高揚が痛打を与え、もつて逆に敵の攻撃に拍車をかけることによつてその帝国主義としての政治的本質を暴露したのである。まさにここにこそ、この段階での攻撃の性格が最も集中的に表現されているのである。すなわち、資本の経済的側面からする労働力確保のみではなく、すでに帝国主義の政治的本質からする攻撃であつたのだ。

ここにこそ早大闘争の敗北の最深の根拠が存在するのだ。すなわち「全国化」をスローガンとしながらも、個別早稲田の枠内でしか闘わず、否むしるこのスローガンを不問に附し、社青同解放派に代表される「産学協同をもたらす資本主義一般の矛盾としてとらえる傾向を強め、戦略的改良主義に一切を解消しようとする傾向が、

逆に闘いの「全国化」をねじまげてしまったのである。

明大闘争におけるブンドの誤りは、我々が高校を、大学を、職場を、安保粉砕・日帝打倒の不滅の誓として構築するための闘いの構造上の問題からいって教訓化するべき、最も典型的な誤りであろう。

当時の指導部全学闘(ブンド)は、ボス交路線と右翼に対する組織的思想的武装を放棄した。この度し難い日和見主義とボス交路線の誤りはいまでもない。問題は、明大闘争を敗北に導いた決定的要因が、改良と革命の関係における果てしない大混乱であり、改良闘争を戦術の徹底のみに依拠しても革命に通ずるといった思考方法にあったということである。この点を現在の第二次学闘闘争がはるかに乗り越えてつき進んでいることはいまでもない。ただし、相も変わらず「産学協同……」の空しき叫びと、右翼メンシエビキ革マル派の「革命闘争と大衆闘争の区別(と連関)」「……末端からの組織化を！」理由とした階級闘争からの召還等々、右派ブロックの諸君を除外して！

さて、以上の第一次学闘闘争の教訓に踏まえ我々は第二次学闘闘争の時代的背景と到達点を明確にせねばならない。

(四) 東大・日大にある第二次学闘闘争の特質

六六年早稲田学費学闘闘争は、全て詳しく前項で述べられているように第一次学闘闘争の頂点を生み出したと同時に、その高揚と挫折の内に根本的欠陥を露呈したのであったが、この闘いは、教訓として学闘闘争の勃発の本質的次元が何であるかという問いを発した。

隊との壮絶な死闘としてのみ闘いとられ、経験したいかなる武装闘争をもはるかに上まわった大激闘とであったのである。それが安保粉砕・日帝打倒の達成過程として学闘闘争が存在することを確認するならば、大学の砦化を政治的・思想的かつ軍事的にもめざす路線なしには、実現不可能であったといえるであろう。

ところでこうした日大闘争の質を全く見ることでできない全自連、メンシエビキ革マル派は、東大闘争の革命的合流の中にあって「帝大解体」の革命的スローガンの下、一気にその闘いが総体として国家権力との総力決戦の時点に突入すると、自ら夢想していた大争闘争とは違いが生じてしまい、にもかかわらずそれが必然的な発生経路を歩んでいるといった厳然たる事実を無視することができず、自己の汚れ、疲れきった党派性を守るため突然闘いの場から姿を消した。それは同時に学闘闘争から革マル派がどんなに騒いでも消えていく姿だったのだ。第二次学闘闘争の過程は、右派ブロックの解体と、凋落を、その闘いの厳しさをもって証明したのである。

第二節 大学物神の根底的崩壊—価値観の流動化

全学連、反戦高協、反戦の闘いが、日本人民の一切の価値観を七〇年安保を軸に形成させていることはいまでもない。とりわけ東大・日大・京大と打ち続く第二次学闘闘争のもたらした高校生への衝撃は、卒業式闘争の全国的爆発の基底を構成し、同時に質的高さを規定したといえることができる。

……闘いの兄弟たちは、「大学を安保粉砕・日帝打倒の砦に」「入

この問いを文字通り正面きって受け、起ったのが第二次学闘闘争。なにかなく日大全共闘の主導性の下に展開された学闘闘争であった。では日大闘争が先行的に、その限りで例外的につくり出した、一八、一九を飛躍のバネに全国大学に衝撃をもって照らしあてられた第二次学闘闘争の質とは何か？

まず第一義的に示すべきことは、学闘闘争というそれ自体、学内的諸矛盾に対する部分的改良課題そのものとして貫いたということである。

安保粉砕・日帝打倒という政治的目標を実現するためには、個別的な政治課題や改良課題のすべての諸課題を非妥協的に安保闘争のもとへとたぐりよせねばならない。こうした前衛的にして合目的に従って疑いもなく徹底的に政治的立場を必要とするということに集約できよう。日大全共闘の「破壊的思想」の現実的な出発点を考えてみれば明らかである。

第二に明記すべきことは、学闘闘争の実践的推進に関する現実認識を媒介にして、学闘闘争の思想内容—原点が逆に浮き彫りにされ、革命と改良に関する革命的立場が全大衆的規模において整えなおされたことである。

明大・早大闘争における限界を、大学の砦化という戦術的設定—現実によって克服したのである。安保粉砕という政治的課題を我々は、七〇年だけの闘争課題としてではなくして、抽象的に想定した日本革命と七〇年闘争とを分離するのではなく、安保粉砕・日帝打倒という日本革命のうちに集約するという認識があったからこそ、かかる改良と革命の混乱を克服し得たのである。

こうしてつき進んだ第二次学闘闘争は、当然にも国家権力・機動試粉砕」のスローガンを躊躇なく掲げ、その「幻想」を目的意識的に打ち破った。そもそも、大学のもつ幻想性—大学物神は、『大学—学問があなたも超階級のものであるか如く見せかける』ものとして形成されてきたものである。大学の役割を歴史的に見れば(国民教育が資本主義段階にはいつて始まり、旧封建社会からの「人間解放」、封建的身分関係からの解放をイデオロギー的テコとしてブルジョアジーのヘゲモニーの下に旧被支配、支配者総体を封建身分関係から解き放ち、賃金労働者の産出へという近代ブルジョア社会創出が課題になってからで、大学の成立もそれに準ずるとみてよい)封建社会から資本制社会の過渡である重商主義段階においては、封建身分関係、主権的・強権的支配から問い解放「自由」「自我の確立が第一義的であり、そのイデオロギーの特質的基盤—資本制機械工業のための自然科学の創出が第二の課題であった。産業資本主義段階にあっては、資本制商品経済の自律調整機能を基礎として、自由思想が全面開花し、更にブルジョア革命が一切の旧被支配者を巻き込んで行なわれるため、全人民を「市民」と称し、「市民」の自由平等の確立が課題となり、政治的・法的にも保障されつつ、更に諸科学が封建社会のイデオロギーを突破することによって成立したことをもって、一切の学問・科学・研究を社会から独立させる志向が生まれ、学問の独立はブルジョアの個の解放理念と結合し、学問研究者—大学人、インテリゲンチヤの活動の自由をも認め、大学の自治・学問の自由の理念を完成するのである。

大学は労働力の養成課程としての意義と、ブルジョア社会の支配イデオロギー諸科学とその実体的担い手を産出し、この二つの機能を軸にして『ブルジョア秩序そのものを再生産している』のだ。

帝國主義段階にはいると、資本制商品経済の自律調整機能の喪失を基礎にして、学問が直接的に産業社会・ブルジョア国家に従属し学問が独立性を失うことと、大学の大衆化・マスプロ化による社会的地位の低下とが相互に媒介しながら、学問の無内容化、非学問化をもたらす、それに規定された大学の自治が破壊され、大学の非大衆化、大学共同体の非現実化をもたらすのである。すなわち帝國主義段階における大学は、教育と研究の二つの機能が分離し、前者は中級技術者を大量産出し、後者は産学協同に傾斜し、支配のための「学問」「技術」とその担い手を産出し、一部エリートを養成し総体として学問の全社会性と相対性が喪失し、さらに帝國主義イデオロギーがブルジョア創成期の「自由・平等・博愛」の理念にとつてかわるのである。今日大学がその權威と秩序を保っていること自体、帝國主義の人民支配の一つのテコとして存在しているのである。(まさに東大こそその最たるものとしてあるのだ。)つまり大学は、教育研究機関としてであるという直接的実体機能(諸科学・技術・支配階級のイデオロギーとそれらの担い手の産出)にとどまらず、「大学が社会に存在すること自体」が階級支配の重要なテコとなっている。

こうした大学の存在自体をとなえ返しつづ、全学連の前衛的、合目的な革命への志向とが織りなすものこそは、「大学を安粉砕・日帝打倒の砦とせよ」である。このスローガンの下、帝國主義の大学支配を結節点にした帝國主義アジア支配体制の反動的再編・強化の野望はことごとく粉碎され、とり得る方策が唯一「機動隊万能論」といった事態の進行の中で、だれでも一度は憧れの的とした「東大」においてすら、大学自治の幻想・学問の欺満性・大学の秩序權威の

崩壊は、我々の大学に対する物神崇拜を粉みじんに粉碎したのである。

第二章 今春卒業式闘争の全国的爆發

前章ですでに明らかのように、全国大学闘争の前衛的、合目的な革命への志向は、それ自体階級的重圧を持つものだが、我々の今春の卒業式闘争の爆發、あるいは三月春闘における革命的左翼としての反戦派労働者の登場―日本階級闘争の中に(日共・社民すら意識せざるを得ないものとしてその姿を登場させたのであるが)、まさにこの力を生み落とす最大の主体的根拠を全国大学闘争の質的高さの中に見てとることができよう。全国大学闘争の決定的重みは、この二つの戦線における二つの歴史的闘争の最深の主体的根拠であるということである。

逆にいえば、卒業式闘争の全国的爆發は、全国大学闘争の歴史的階級的要請に対する我々の実践的回答に他ならない。だからこそまた同時に、戦後日本高校運動の画期的な新局面を切り拓く上での歴史的橋頭堡としての位置を、卒業式闘争は、獲得することができたのである。

一月佐藤訪米阻止を軸とする沖繩奪還の闘いを歴史的切り口として開始する七〇年と七〇年代階級闘争に逆算された本全国大会を、卒業式闘争を軸として開始した戦後日本高校生運動の第三局面の歴史的階級の意義を撰取し、拡大強化していくものとしなければならぬ。従って我々は、このような観点から卒業式闘争の意義を徹底

的にくみ尽くさねばならない。

第一節 日本帝國主義の累積と卒闘

すでに何回となく日本帝國主義の危機と、その反動的收拾が、大衆学をあるいは高校を総じて教育体制を結節点に表われ、今日その政治変遷が革命的左翼によって遂行されていることは言を待たない。従って日本帝國主義の累積と全国大学闘争の爆發を主体的根拠ととしつづ、卒業式闘争の爆發があったのであるが、これを総括するにあたって、日本帝國主義の危機的様態について次の諸点を前提的に踏まねばならない。

そもそも現代とは、帝國主義段階に突入した資本主義社会の、(ロシア革命を突破口とした)社会主義社会への移行の時代的過渡期としてあり、資本主義社会の死の苦闘の時代である。しかし、国際共産主義運動のスターリン主義的歪曲による各国共産党の戦後革命運動の裏切りによって、帝國主義の延命を補完することを一つの条件としながら、国際帝國主義に世界経済のブロック化、有機性の崩壊をアメリカ帝國主義を盟主としてブレトウツ協定を基礎にドル・ポンド国際通貨体制によって欺満的に統一し、更にマーシャルプランをテコとした集団安保体制を確立することをもって、帝國主義戦後体制を築き上げたのである。しかし、EBCの拾頭、更にはベトナム侵略戦争の敗北によって、米帝の地位の相対的低下を急速に推し進め、それをテコとしたドル・ポンド、そしてフラン危機によるアメリカ帝國主義自体の危機的様態が、米帝の圧倒的力量の下

に支えられ、成立した帝國主義戦後世界体制をして根底的動搖に直面させている。

アメリカ帝國主義自体の危機の進展が、帝國主義戦後世界体制の盟主たる米帝であるが故の帝國主義総体への危機の進展を余蘊なくするものとして、その歴史的性格を見ることができよう。従って特に、敗戦後自己の経済的脆弱性を米帝の庇護の下で成長させてきた日本帝國主義にとっては、六二年以来の経済上の諸矛盾が現在において内在化されたままという事実をテコとして深刻な危機を招いているといわねばならない。

こうした中において日帝の基本的政策Ⅱ攻撃が、アジアにおける唯一の帝國主義として全土基地化、政治的臨戦体制化を図りつづ、米帝にとってかわってアジア支配を強化することになり、従って沖繩の永久核基地化を強化する方向としてまず第一にある。その第二の攻撃が、日帝の経済的な諸矛盾を解決する方向で、これは一言でいって徹底的な大衆収奪である。一切の矛盾の人民大衆への犠牲転嫁としてある。その第三は、全国大学闘争を戦術的環として日本階級闘争の先頭をきいている学生、春闘をはじめ国鉄労働者を先頭とする労働者の闘い、総じて人民の大衆的反撃に対する弾圧と、その保持する行政権力のポナバルティズムの肥大化である。

このような「死滅しつづつある資本主義」としての現代から時代的制約を受ける中で高校生にあっては、高校教育の一層の産業資本との露骨な結合いわゆる「人間能力開発」等なるものと、帝國主義イデオロギー注入とを両軸とした攻撃を受ける中で、豊富な不満が蓄積されたということができる。

今日、どの階層、階級をとってみてもその内に革命的エネルギー

を包括しているように過去のどのような時期とも異なっており、この時期の高校生大衆は鋭い感性をもって、革命的エネルギーを包括していたといえるのだ。卒業式闘争の爆発こそは、その証左以外の何ものでもないのである。

第二節 戦後日本高校生運動の高揚局面と

卒闘を軸とする第三期高揚局面

さて前節で若干触れたように、「死滅しつつある資本主義」としての現代社会が極めて末期的な様態を露呈し始めるとともに、高校生運動がわが反戦高協の前衛的闘いを先頭に新局面を迎えていることは明らかな事実である。従ってこの事実を裏づけるものとして、戦後日本高校運動の発展過程を再度とらえ返し、本大会の歴史的意義に更に厚みを加えたいと考える。

六九年卒闘一四・二八一六・一五の一括する闘争過程の起伏進展の内に、我々は今や明確に戦後第三回目の高揚局面を形成しつつある高校生運動の新局面を見ることが出来る。

しかるに高校生運動の第一高揚局面とは何か？ いうまでもなく日本階級闘争の二・一ゼネストを軸とした戦後革命期の熱い息吹きの中で展開された「学制改革・学園民主化・自治会建設」の闘いの渦中における一大社会運動の担い手としての高校生の登場であろう。その闘いが歴史を担っているかどうかで、その時期が高揚局面か否かを決めるといふ観点に立つならば、(すでに、我々の闘いと、敵権力をして破防法の発動をもって崩壊を開始した。)今日の戦後

とができる。

その第一の視点は、運動の総体的指導部即前衛党の独自の建設の問題であり、その第二の視点は、高校生総体によって立っている全社会的動揺の成熟、未成熟の問題である。

この二視点を踏まえる時、我々は今日日本階級闘争の重要な一環としての高校生戦線に起きつつある。第三の高揚局面は、「反帝反スターリン主義的革命的左翼の指導性の媒介項をすでに獲得している」点において、またそれ以上に、義務教育と大学、職場に上下からはさみ込まれ、徹底してそれに順応することによってかろうじて持ちこたえてきた「高校生層の伝統的基盤の崩壊、それによる新しい価値観の形成」という点において、過去二度にわたる高揚期とは比較にならぬほど客体的主体的要因を内包させているのである。

多言を費さないが、このことを構造的に把握するならば、日本資本主義の平和的発展期における闘いと決定的な差違が「死滅しつつある資本主義」の時代には存在するという点、いかえれば、四・二八闘争の如き日本革命の現実的課題、ある破防法の発動の中で高校生生活動の政治参加は、活動家主体の徹底的な質的強化を促しているという点である。

第三節 卒闘と反戦高協の組織的闘い

卒業式闘争の全国的爆発の必然的な根拠について簡単に触れながら、「四つのバリケード封鎖」闘争を軸として闘った反戦高協の卒闘への革命的な介入の果たした役割についてこの章の最後のしめく

体制を構成している一方の軸の内にこの闘いが存在していたという事態が明瞭に示しているように、まさに第一高揚局面として認識されるであろうことは疑う余地がない。

第二の高揚局面は、「動評・安保における高校運動」の再建期である。日共五全協一六全協のジグザグ路線の中では完全に停滞していた高校生運動に徐々に政治的生命力を与えてきたのは、大きな意味で当時日共指導下から脱皮の苦闘を開始していた「全学連」であった。(安保プリントに支持を寄せる青年教師による社研活動、新聞部指導活動や、全学連高対部の積極的指導、帰郷する学生のオルグ等、諸々の具体的対応策も無視できない)

この時期の先進的高校生生活動層の政治参加は、全学連のつくり出す先駆的な階級闘争の社会的波及の中で急速な政治的成果をとげるに至った。

動評闘争においては、東京を始めとする全国的な高揚を生んだのであるが、とりわけ四国地方の闘いは、激化の一途をたどり、遂に学校をバリケードまではいかないまでも、座り込みによる事実上の占拠闘争を繰りひろげ、警官隊との実力対決による血の歴史をもっている。

安保闘争においては、文字通り「全学連」とシツワを並べた闘いを展開したわけだが、この傾向が最も強かった関西においては、京都の「府学連」の書記次長を高校生が担当するといった事実が代表的に示している。

我々は、過去における闘いの血の道標に従って、より徹底したものと再び、このような闘いを展開するにあたって、各々の歴史の高揚期における戦線の実情を次の二つの主要点からとらえ返すこ

くりとしたい。

卒闘を爆発させた必然的根拠のまず第一は、すでに本章第一節において詳しく展開したように、戦後体制に規定されていた諸々の条件の急速な崩壊に主導されて、高校生の日常生活を支えていた諸条件も急速な変化を受けたということ。これは多くの場合政府ブルジョアジーによる高校教育の一層の帝国主義的再編として推し進められようとしていることを基礎にして極めて豊富な不満がうっ積されていたことである。

第二にそれが「卒業」という自らの過去の三年間の総括を伴う一契機を媒介にして全面化したに過ぎないということであり、第三はにもかかわらず、安保粉砕・日帝打倒の戦略に基く大学闘争の爆発は、その契機を部分的修繕の領域にとどめることなく、全体系革命への志向としてあらねばならないという提言を血の叫びをもって訴えていたということであり、そして最後に、しかし最も重要な卒闘激化の要因として、それらを高校生生活を媒介させて四五〇万高校生層全体の自然発生の行為との合流を勝ちとらせる確な思想的・戦術的指導がわが反戦高協を意識的、組織的活動を導きの糸として出現しているということである。

当然のことながら、阪南・茨木・武蔵丘・都立大付一四つのバリケード闘争、更には直接反戦高協の指導の下に展開されたものだけでなく、全国五六校卒闘の激発は、偶然のつぎ足しなものではなく、反戦高協即少数革命派の断固たる闘いの波紋に応えたものとして、それ自体の構造上有機的関連性を持っていたに他ならない。まさに、我々の構築したバリケードによって全国数万の高校生を決起させただけでなく、「高校に、職場にバリケードを構築しな

い方が異常だ。」といわしめるまでに運動観・価値観を転換せしめ、更には部分的にせよ我々反戦高協の闘いが卒闘を「安保粉砕・日帝打倒の水路」に解き放ったが故に、高校生の価値観を安保へ！安保へ！と推し進めたことは、はっきりと明記されねばならないだろう。まさに、四・二八沖繩奪還闘争こそは、部分的にせよこうした卒闘の教訓に踏まえた実践的回答としてあったに他ならない。

第三章 四・二八沖繩奪還闘争・首都制圧・首相官邸占拠の闘い

首相官邸占拠の闘い

第一節 四・二八闘争の切り開いた地平

七〇年と七〇年代階級闘争は、戦後日本階級闘争の直接の延長線上には決して存在することはなく、いしかえれば四・二八沖繩奪還闘争の爆発をもってする日本階級闘争の画期点の揺ぎない形成を勝ちとってこそ、その革命的資質を公然化することができたのだ。かかる四・二八沖繩闘争の切り開いた地平とは何か？ この間に正しく回答するか否かによって、七〇年代階級闘争とそれに引き続く七〇年代階級闘争の真価を見ぬくことができるかどうか決定する！

まず第一義的に確認すべきことは、戦後日本階級闘争二十四年間の混乱の原点ともいべき沖繩の軍事的分離支配の許容の現実に対し高々と沖繩解放をその有機的一環とする日本革命の根本方向を沖繩として明示したという事実である。

主義者はもちろんのこと自民党政府ブルジョアジーをも闘いの真只中に引きずり込み、その政治的生命を沖繩に集中せざるを得なくしたということであり、その役割を自らの血と汗をもって実現した革命的左翼が、その姿を日本階級闘争の中に鮮明に浮かび上がらせたということである。

更に第三点として確認すべきことは、破防法を日本階級闘争の現実課題として引きずり出し、文字通り革命と反革命の衝突として階級闘争の不可避的な進展を誰の目にも公然としたということである。日本列島を貫き通す真紅の火柱として実現した四・二八沖繩奪還闘争は破防法を引きずり出し日帝の権力の強権的支配の意図を暴露するとともに、出入国管理法、大学治安立法として権力による戦後民主主義の「破壊」として提起させている。従って権力のポナバルティズムの肥大化の強化の方向はほんの一握りの帝国主義者以外の全ての人民大衆を敵にまわしたという意味において、日帝のこのような狂乱的姿勢の中に、自らの墓穴を掘るともいべき政治的脆弱性を余すところなく暴露した。まさに我々の安保粉砕・日帝打倒戦略にとって、一層広汎な戦術的領域をも拡大したということができる。まさに治安弾圧権力の警察国家的肥大化という事態をもってするこのような戦術的領域での拡大は、左からの回答として大学立法粉砕・全都全共闘一万人の決起六・一五―七万人の総決起が如実に示しているといえる。

第二節 学生戦線「一〇・八」を

労働戦線・高校戦線の「一〇・八」へ

そもそも沖繩問題は、戦後二十四年にわたる日本階級闘争の中で不問に付されながら、しかし実際はその軍事的分離支配の安定によって、帝国主義アジア分離支配への要石となり、従って日帝の「エコノミックアニマル」としての肥大的発展の実質的支柱を日米安保同盟の基軸たる沖繩は、背負わされてきたということへの本土人民の深刻な階級の反省を要求する問題なのである。まさにベトナム侵略戦争の継続の内でのみ平和的様態をとり得た帝国主義の奇型性を読みとりつつ、基軸国米帝のベトナムにおける敗退と日米同盟のアジアへの侵略的発動の内、日米両帝国主義を直接おそう特殊部分的権威をもってする戦後革命的情勢を看取したのだがそのことはまさに帝国主義戦争とその帝国主義的処理の犠牲的産物である沖繩とそれによる日米安保同盟の戦後革命的任務の今日的螺旋的突破を提起している。しかもなおそれは直接的には戦後革命のスターリン主義的歪曲の突破として表われているにもかかわらず、アジアの危機の深刻化が、全人民のスターリン主義的屈服により帝国主義の延命をもってする戦後世界体制の根底的動揺をあばき出すものである以上単にそれにとどまらず、反帝国主義・反スターリン主義世界革命に向かつてアジアを一挙に根拠地化するということをもち同時に表現するのである。まさしく沖繩問題は、沖繩解放を有機的不可欠の一環とする日本解放を勝ちとり、それをまた世界革命に向けてアジアを拠点地化するという開かれた方向に向かつてはじめて解放されるものとして、従ってその過渡的戦術的表現を沖繩奪還として必ず表現しなければならぬということ、まさに四・二八の血の道標として積極的に確認しなければならぬ。

第二義的に確認しなければならぬことは社会党日共スターリン

ベトナム侵略戦争における米帝の危機的様態に対する日米同盟を基軸とした日帝の参戦国化と対外進出の成否をかけて自由主義国家初の訪ベトは、日本階級関係に決定的な転換点としてあった。

日本帝国主義の歴史的転換＝参戦国化に対する一〇・八の闘いはまさに革命か改良か部分的要求か、全面的変革か、として問題がたてられ、「いかに敗北するか」といった過去の闘いの特徴であった改良闘争の最終局面における発想に終止符をうち「いかに勝利するか否か」という問題の設定に基く、断固たる実力闘争の内に勝利の展開を見出したということである。こうして山崎同志の屍を越えて機動隊の厚い壁と反撃を何度となく突破したのである。

わが全学連は、こうした断固たる実力闘争の展開をもって一〇・八羽田の闘いを階級主体にとしての歴史的転換として、揺ぎない橋頭堡を形成したわけだが、この爆発的エネルギーの源泉が全学連の意識性・組織性にあったことは多言を要さない。

まさに歴史は偶然や思いつきでは動かすことができないということとを、一点の曇りもなく鮮明に浮かび上がらせた。ましてや目的意識的作業たるプロレタリア革命とそのための闘いは、その最も自覚的部分、すなわち、指導部の意識性、組織性に一切がかかっているということ、これをこのうえなく明らかにしたのである。

今や全国の高校を闘争のルツボにたたきこんだ卒業式闘争は、まさにこの革命の現実性に踏まえた意識性と組織性をもってしか表現できなかったことはいまでもない。だが、たしかに反戦高協の闘いとつた卒業式バリケード封鎖闘争の中にはこのことが貫徹されていたとはいえず、「四五〇万高校生層のプロレタリアの獲得」を目標とする我々にとつて、五六高校の闘争を有機的においてのみだけで

はなく明確にこの下にたぐり寄せていたとはいいがたい。

こうした、ある意味では高校戦線における後進性をいかなる犠牲をも乗り越えて、まさに学生戦線における「一〇・八」の組織的武装軍団の登場としての「質的転換」を勝ちとらんとした闘いが、四・二八沖繩奪還闘争における唯一の高校生軍団の登場として表わされた闘いであった。「片手に角材、片手に高い思想性」を合言葉に反戦高協初の全国動員を勝ちとりつつ、青ヘルメットの日和見主義集団を尻目に、彼らから角材を取り上げて首相官邸に揺ぎない怒濤の進撃を開始したのである。まさにこのことの組織的実現は、沖繩の奪還を一方の軸として、他方戦後世界体制の根底的動揺とを両軸とした現代社会の適格な把握とそれによる日本革命の現実性に踏まえつつ強固な革命理論による組織的武装と、反戦高協の活動家主体の意識性・組織性にこの日本プロレタリアート人民の激闘は、「職場占拠を！」「職場にバリケードを！」「万余の機動隊を兵力で打破せよ！」といった価値観の転換を獲得した。事実、四・二八闘争の最中、あの銀座解放区を構築した力がだれでもない反戦に結集する労働者ではないか。

主客にわたる最深の根拠があったということができよう。

(このことの不徹底さは、だがしかし、高校秩序の革命的打破による革命派の主体的強化の不徹底さとして総括されるべき点をも内在させていた。)

一〇・八それは山崎博昭同志虐殺をもって深刻な、だからこそ画期的な「質的転換」として影響をもたらした全学連の闘いは、わが戦線への革命的伝授だけでなく、日本革命の担い手たる反戦青年委員会の労働者による四・二八―銀座解放区構築の闘いに果たして

階級的使命の根幹にその精神を貫かせたのである。逆にいえば、春闘における動労千葉におけるバリケード闘争を端緒として、全国大争闘争の感動を基底に、「運動観」「価値観」の転換を四・二八の首都制圧の中に拾頭せしめ、自らの力量をもって「一〇・八精神」を主体化したということである。

第四章 革命的激動の序曲から

日本革命への本格的躍動の開始

今日激発している一年有余にわたる大学闘争の展開は、まさに全戦線における、否日本の歴史に最も欠落していた革命的序曲のはじまりなのであり、破防法の発動をもってはじまり日本列島を貫き火柱をもって爆発した四・二八沖繩奪還闘争は、序曲にかわる緊迫化する日本革命への本格的躍動を開始せしめたのである。この四・二八の切り開いた平地にしっかりと踏まえ一月沖繩奪還大決戦をもって首都制圧を勝ちとり、佐藤訪米を阻止し、日本革命へ向かって拾頭を決意している。

今日の情勢を正しく把えるならば、この提起が全く現実的なものであることがわかる。

我々の七〇年闘争を規定している第一の要因が、日本帝国主義の戦後体制が根底的に動揺しているということであり、この過程を通じて久しく階級闘争の舞台に登場してこなかった階層・階級をも、再びそこに引き出しつつあるということである。

二十余年にわたる米軍の沖繩に対する直接的軍事支配が、完全武

装の銃剣を恐れない勇敢な労働者階級と百万沖繩県民を、七〇年闘争に登場させた。

破防法・大学治安立法・出入国管理法等一連の戦後民主主義の右旋回の開始の中に、今まで決って起とうとしなかった学生の中で最も政治的に遅れた層まで闘いに吸引し、たてを持つ機動隊がヘルメットの色と警棒の一打で、短期間に大量に闘志を生み落としてつあり、出入国管理法案に対して、在日外国人がヘルメットをかぶってデモをするという日本階級闘争に今だかつてなかった事態を引き起こした。さらには、高度成長がもたらした若年労働者の大量の産出による階級闘争の新たな担い手としての反戦青年委員会の厚さを加え、国鉄大合理化の攻撃は、国鉄労働者の戦いを「七〇年の三池」へ押し上げようとしている。

生産者米価を前年のままにすえ置きにすることによって農村の秩序を揺り動かし、後景に退いていた農村を再び階級闘争に登場させようとしている。また北富士、三里塚、砂川の農民は七〇年を前に再びその戦闘的姿を登場させようとしている。そして狂気の季節として表現している国家権力の暴挙は、「新宿広場」にみられるようにますますその広汎な大衆を反権力闘争へと導いているのである。

一月決戦を前に、佐藤訪米を阻止する壮大な歴史的闘争を実現するその現実的条件は今や全く成熟している。

この期にあっては、「反帝・反スタ世界革命へ」「安保粉砕」

「日帝打倒」の革命的立場の早急な確立のためにこそ、情勢的確な把握による我々の武装強化が要請されている。

かかる世界史的要請に対する我々の情勢把握の立場を明らかにす

る第二報告へと突入することをもって本報告を終えたい。

十一月決戦を突破口とする「激動期」 に向けての反戦高協の任務方針（視点）

第一章 「革命派」宣言

すでに本基調報告の第一、第二テーマで鮮明に浮き彫りにされている革命と反革命の総力決戦の時代において、自己の階級的立場に組織的表現を与え、階級関係の一大二極分解に対して、断固として「革命派」を名のるといふことの重大性を痛切に感じることが出来る。一切の行為の主体的根拠前提として、このことが確認されなければならない。

大衆的規模においても一大二極分解を開始する時（あるいは、そうせねばならない時）自己の政治的立場をあいまいにした革命運動は、それ自体革命闘争として決して成立しないであろう。

我々は「革命派」を名のるといふ主体的決断を自己に対して提起することからまずはじめねばならない。

第二章 「四五〇万高校生のプロレタリア的獲得」を

一月沖繩奪還、佐藤訪米阻止闘争から逆算して、万余の武装軍団登場、独自の高校生武装軍団の登場を我々はいかに獲得していくかといった、現実的にもかかわらず、思想的理論的問題に直面しないわけにはいかない。これを無視したところに残存するのは、空論主義、革命的樂觀主義の夢想しかあり得ない。こうした道を厳しく拒否する我々は、(これこそが革命派の高度な思想性であるのだ。)次のように問題を構成しなければならない。

そのことのまず第一は、第一報告卒闘の総括の中で明らかにされているように、また四・二八闘争の中で明らかにしている如く、万余の軍団を形成するための意識的闘いを日大全共闘の提言「破壊の精神」に徹底的に貫かれた高校生秩序の革命的打破をもって成し遂げねばならないということである。

日大全共闘の提言「破壊の精神」とは、根源的な真理の大学の建設があるとすれば、それはプロレタリア独裁の下ではじめて可能となるのであって、従ってプロレタリア独裁へ向かって、現秩序の徹底的な破壊が不可避の課題であること、その現実的発想形態がまさに大学を環とした日本帝国主義社会秩序の根底的破壊としてあるのであり、まさにかかる意味で闘いの永続化、非妥協的性格に思想的根拠を与えているのである。この思想に裏打ちされた大学闘争は、だからこそ安保粉砕・日帝打倒の一大戦術的環としてその階級性を獲得しているといえよう。

従って我々は、階級闘争の平和的發展段階を今だ歩んでいる高校生運動の恐るべき後進性を高校生生活におけるブルジョアの秩序の革命的打破をもって「破壊の精神」を、その思想的根拠としつつ逆行し、積極的に乗り越えなければならぬ。いかなる部分的改良課

題をも、ブルジョアの獲得とすることをただちに停止し、安保粉砕日帝打倒の水路へ、もっといえば闘争の泥沼的、永続的發展の内に高校生秩序の徹底的打破自らを「帰る所のない」闘いへと転化しなければならぬ。こうした永続した闘いが、革命派に主導された革命的学友の多量産出をも同時に表現している。ここにこそ、万余の武装軍団登場の鍵があるのである。

一月決戦へ向け万余の武装軍団の組織化を獲得するために第一に確認すべき点は、こうした闘いの広汎な拡大が「ノンスト・ラジカル」と称される人々に代表されるブチブル性自然発生性との思想的理論的対決の非妥協的貫徹をも同時に実現しなければならぬということである。そして更に積極的に確認すべきことは、そのための革命派指導部「反戦高協の強固な建設が、不可欠の課題である」ということである。

まさにこうした思想的対決を推し進めることができるのは、革命派たる反戦高協以外にはあり得ない。本大会に結集した全ての学友諸君の前に、我々はすでに自己の出発点を、革命派を名のるのか否かという主体的決断として提起している。従ってこの判断を主体的根拠にして闘争に参加している活動家層によって構成された組織が反戦高協である以上、革命派としての任務が、まさにブチブル性自然発生性との思想的対決の深化を一方の媒介軸とした、「四五〇万高校生層のプロレタリアの獲得」であることは、多言を要さないであろう。

第三章 『歴史的試練に打ち勝ち、ボルシェビキ的組織体を勝ちとれ』

激動に生きる喜びの問題、我々は巨大な歴史的転換期に生きる人類として、人間の歴史を止揚する階級闘争の英雄時代を担う人間として、大激動が生起する一切の試練を喜びをもって受け止めるであろう。

こうした革命的英雄主義に徹頭徹尾貫かれ、そしてロシア革命を指導したボルシェビキの如く、鉄の規律と組織に対する献身性、いかにあるならば、一切の任務方針がそれ自体として自己貫徹に意義を有するのではなく、それが貫徹できるのか否かといった貫徹力の問題を媒介してはじめて、革命的意義をも充分に発揮することができるのである。

まさに一切の問題が、「その貫徹力として等しく問われている」といわねばならない。従って一切が、全ての学友諸君の手の内にあるのだ。

(おわり)

編集後記

第一論文

第二回大会基調報告の一部をのせた。その全文は別冊(報告決定集)にして出すぞ、乞う期待。

第二論文

第二次学園斗争を先取りして斗われた青山高斗争の性格が浮きぼりにされると思う。読むより闘うべきだと書いてある!?

第三論文

奔流No.84で提起した「帝国主義教育粉砕」のヌローガンの基礎づけ。革マルは自主活動のスブズブ改良主義。解放はあゝもかわらぬ産学協同紛砕できぬ紛砕路線。MLは日帝確立万才で「帝国主義教育粉砕」でいいそうだ。

(圭太郎)

□ 発行日 一九七〇年三月二五日

□ 編集 反戦高協編集部

□ 発行 反戦高協中央書記局

東京都豊島区東池袋2の62の9

TEL (九八四) 八六五一

□ 定価 一五〇円/送料五〇円

